

京都府埋蔵文化財情報

第44号

平成4年度発掘調査予定の遺跡-----	水谷 壽克-----	1
平成3年度京都府内埋蔵文化財の調査-----	奥村清一郎-----	6
墓域の中の集団構成（前編） —近畿地方の周溝墓群の分析を通じて—	岩松 保-----	14
—平成3年度発掘調査略報—-----		25
20. 遠所遺跡群	24. 長岡京跡右京第381次	
21. 蔵ヶ崎遺跡第2次	25. 木津川河床遺跡	
22. 天若遺跡第3次	26. 口仲谷古墳群	
23. 八木城跡・堂山窯跡第1次	27. 大切遺跡	
資料紹介 弥生時代鉄製品の事例-----	野島 永-----	42
研究ノート 園部町垣内古墳出土の盤龍鏡-----	原田 三壽-----	45
海外研修だより 中国の旧石器時代遺跡を訪ねて-----	中川 和哉-----	49
研修だより 中国陝西省・姜宝蓮氏の研修-----	磯野 浩光-----	53
センターの資料活用状況-----	松井 忠春・田中 彰-----	56
府内遺跡紹介 55. 氷室跡-----		64
長岡京跡調査だより-----		67
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧-----		70
センターの動向-----		71
受贈図書一覧-----		73

1992年6月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

平成4年度発掘調査予定の遺跡

水谷 壽 克

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、国・公社・公団・府等の開発行為により、どうしても影響を受けることが避けきれない遺跡について調査を実施しており、その事業量は年々増加している。事務局の体制は、昨年度の3課6係体制から、総務課1名、調査課4名の増員を行い、3課7係体制(総務課1係、調査1課2係、調査2課4係 総職員数48名)とし、業務の円滑化を図っている。

平成4年度に予定している受託事業件数は、別表に示したとおり、26件を数える。このうち、発掘調査の受託件数は22件(45遺跡)、残る4件は遺物整理・報告書作成の受託事業である。発掘調査22件を原因別にみると、道路新設・改良に伴う調査が8件、農地ほ場整備関係が4件、庁舎・学校・住宅建設等に伴うものが5件、施設整備・ダム建設・宅地開発・公園開発・団地造成に伴うものがそれぞれ1件を予定している。

以下、今年度調査予定の遺跡について別表事業予定一覧表に基づき略述する。

1 遠所遺跡群ほかは、丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)に伴う調査である。弥栄町遠所遺跡群は、昭和63年度から約46haを対象面積として調査を実施し、製鉄炉・鍛冶炉・炭窯・住居跡等多数の遺構・遺物が出土している。古代製鉄史研究において注目されている遺跡であり、今年度は約60,000㎡を対象として調査を行う。このほか、古墳群4件(久美浜町薬師古墳群・弥栄町中谷古墳群・大宮町左坂古墳群・大宮町里ヶ谷横穴群)、集落跡2件(弥栄町奈具岡遺跡・奈具谷遺跡)の調査が予定されている。

2 鳥取古墳群ほかは、丹後地域の農業生産の拠点となる「丹後あじわいの郷」建設に伴う調査である。鳥取古墳群は、遠所遺跡群の東に隣接する丘陵地に築かれた約90基からなる古墳群である。また、その谷部は古代製鉄に関連する遺構の検出が多分に予想され、今年度は丘陵・谷部の試掘調査を実施する。

3 桜内遺跡ほかは、一般国道176号道路新設改良工事に伴い、加悦町桜内遺跡・囃岡遺跡の調査を行う。桜内遺跡は、昭和63年度に試掘調査を行い、奈良時代から中世に至る遺構・遺物を検出している。囃岡遺跡は、昨年度試掘調査を行い、径約12mの円墳1基・中世墓・柱穴等を検出し、また縄文時代早期の土器片が多数出土することから縄文遺構の

存在も期待される。

4 定山遺跡^{じょうやま}は、過去2度にわたり調査が行われ、縄文時代から平安時代にかけての集落跡であることが判明している。今回、遺跡の一面に府営住宅の建設が計画されたため調査を実施する。

5 桑飼上遺跡^{くわがいかみ}ほかは、京都縦貫自動車道建設に伴い、舞鶴市桑飼上遺跡・綾部市七百石遺跡の調査を予定している。

平成4年度 発掘調査事業予定一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	原因工事
1	遠所遺跡群ほか	生産遺跡ほか	弥栄町ほか	農地造成
2	鳥取古墳群ほか	古墳ほか	弥栄町	施設整備
3	桜内遺跡ほか	集落跡ほか	加悦町	道路建設
4	定山遺跡	集落跡	野田川町	住宅建設
5	桑飼上遺跡ほか	集落跡ほか	舞鶴市ほか	道路建設
6	細谷古墳群	古墳	綾部市	草場整備
7	天若遺跡	集落跡	日吉町	ダム建設
8	八木城跡ほか	城館跡ほか	八木町ほか	道路建設
9	千代川遺跡	官衙跡ほか	亀岡市	宅地造成
10	池尻遺跡	集落跡ほか	亀岡市	道路建設
11	鹿谷遺跡	集落跡	亀岡市	土地改良
12	祇園谷遺跡	集落跡	京北町	ほ場整備
13	上中遺跡ほか	集落跡	京北町ほか	校舎建設
14	平安京跡(府警)	都城跡	京都市上京区	庁舎建設
15	平安京跡(住宅)	都城跡	京都市下京区	宿舎施設建設
16	平安京跡(堀川)	都城跡	京都市上京区	公園建設
17	植物園北遺跡	集落跡	京都市左京区	道路建設
18	長岡京跡(名神)	都城跡ほか	大山崎町ほか	道路建設
19	長岡京跡(乙訓土木)	都城跡	長岡京市	道路建設
20	内里八丁遺跡ほか	集落跡ほか	八幡市	道路建設
21	今城跡	城館跡	山城町	道路建設
22	西山遺跡ほか	古墳ほか	木津町	団地造成
23	桑飼上遺跡	集落跡	舞鶴市	
24	三宅遺跡ほか	集落跡	綾部市	
25	平安宮跡(職安)	都城跡	京都市上京区	
26	算用田遺跡	集落跡	大山崎町	

6 細谷古墳群は、府営草地整備事業に伴い昨年度に継続して調査を実施するもので、横穴式石室を内部主体とする6基が確認されている。今年度は古墳3基の調査を行う。

7 天若遺跡は、古墳時代後期を中心とした集落遺跡であり、日吉ダム建設に伴い、平成元年度から継続して調査を実施している。調査範囲が広大であることから、古墳時代の集落構造を解明する貴重な資料となる。また、奈良・平安時代の建物跡群のほか、旧石器時代から中世に至る各時期の遺物が出土している。

8 八木城ほかは、国道9号バイパス京都縦貫自動車道建設に伴う調査である。八木城の調査では、大手口にあたる城郭の一画及び城下町の構造が期待される。このほか、八木



平成4年度 発掘調査予定遺跡位置図

町古谷須恵器窯跡や沢ノ谷古墳・園部町今林古墳の調査を予定している。

9 千代川遺跡は、住宅区画整備事業に伴い、丹波国府推定地東限の東側を帯状に進入路が建設されることから調査を実施するもので、国府域復原に関する遺構の検出が期待される。

10 池尻遺跡は、大堰川左岸の平野部に位置する遺物散布地で、坊主塚古墳や時塚遺跡に隣接している。府道新設に伴う継続調査で、昨年度の試掘調査では、弥生時代前期及び奈良時代前期の遺構を多数検出している。

11 鹿谷遺跡は、公害防除土地改良事業に伴い昨年度から実施しているもので、古墳時代の集落跡を検出している。北部丘陵斜面に群在する鹿谷古墳群との関連から興味ある調査となろう。

12 祇園谷遺跡は、府営ほ場整備事業に伴う調査である。白鳳時代の古代寺院である周山廃寺の東、上桂川を挟んで東岸微高地上に位置し、奈良・平安時代の遺物が散布している。周山廃寺との関連が期待される。

13 上中遺跡ほかは、府立学校の増改築に伴う調査で、京北町上中遺跡(北桑田高校)及び木津町燈籠寺遺跡(木津高校)の調査を予定している。上中遺跡は、過去5回の調査により弥生時代中期から奈良時代に至る集落遺跡であることが判明しており、今回はその北西地域確認の調査を行う。燈籠寺遺跡は、内田山丘陵に位置する弥生時代前期から奈良時代にかけての複合遺跡である。今回は、集落跡及び古墳(内田山A-1号墳)の調査を行う。

14~16 平安京跡関係では、3件の調査を予定している。14は府警本部庁舎建設に、15は公立学校共済組合京都宿泊所建設に、16は府営住宅建設に伴うもので、それぞれ平安京修理職町・町尻小路及び勘解由小路の交差点付近、平安京左京一条二坊・東堀川小路と東宅地区画、平安京右京七条三坊二町・道祖大路及び西宅地区画に相当する。平安京条坊復原の一資料となろう。

17 植物園北遺跡は、弥生時代後期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡として知られている。今回、その一画に公園整備が計画されたことから調査を実施する。

18~19 長岡京跡関係では、2件の調査を予定している。18は、名神高速道路拡幅事業に伴うもので、長岡京跡では右京九条三坊付近に相当し、また百々遺跡・算用田遺跡・松田遺跡・下植野遺跡・東土川遺跡等の弥生時代から中世にいたる各遺跡が含まれる。19は、府道拡幅工事に伴い、長岡京跡右京五条三坊十一町の調査を行う。

20 内里八丁遺跡ほかは、国道1号バイパス京都南道路建設に伴う調査で、弥生時代の稲株痕の残る水田面を検出し注目された内里八丁遺跡の継続調査、及び新田遺跡・荒坂遺跡の調査を行う。

21 今城跡は、山城国一揆の西軍畠山義就の居城と伝えられる城跡で、その丘陵裾の一面を府道が横断することから調査を実施する。

22 西山遺跡ほかは、関西文化学術研究都市建設に伴う調査である。西山遺跡・西山塚古墳は昨年度からの継続調査で、未調査部分約1,500㎡を対象として実施する。上人ヶ平5号墳は、昭和63年度周溝部調査に継続して墳丘及び埋葬施設の調査を行う。上人ヶ平3号墳は、上人ヶ平遺跡の西端に位置する古墳で、今年度新たに実施する。

23 桑飼上遺跡は、由良川改修に伴い昭和62年から平成2年度まで調査を実施し、弥生時代中期から後期の集落跡や、奈良時代の官衙的色彩のある建物跡群を検出している。平成5年度報告書刊行をめざし整理作業を行う。

24 三宅遺跡ほかは、近畿自動車道敦賀線建設に伴う調査の整理・報告で、今年度は報告書作成の最終年度にあたる。総数500基以上の土壌を検出し、古墳時代初頭の共同墓地と考えられる綾部市三宅遺跡、弥生時代末期から古墳時代初頭の集落跡及び平安時代の緑釉陶器や青白磁・円面硯等が出土する官衙的色彩の強い建物跡群を検出した小西町田遺跡の報告書を作成する。

25 平安京跡は、公共職業安定所改築に伴い昨年度調査を実施し、豊臣秀吉が築いた聚楽第の東堀を検出し、多量の金箔瓦や土器類が出土したため、今年度整理作業を進め、報告書を刊行する。

26 算用田遺跡は、郵便局建設に伴い昨年度調査を実施したもので、古墳時代の集落跡を検出したものを今年度整理・報告を行う。

(みずたに・としかつ=当センター調査第1課企画係長)

平成3年度京都府内埋蔵文化財の調査

奥村清一郎

平成3年度に京都府で行われた発掘調査は、史跡の現状変更に伴うものも含めると約170件を数える。このうち、主なものいくつかにつき、発掘成果の概要を以下に紹介する。

旧石器・縄文時代

旧石器時代に属する遺跡を対象とする調査は行われていない。遺構に伴うものではないが、特筆すべき資料として宇治市宇治二子塚古墳の封土から発掘されたナイフ形石器とチャート剥片がある。ナイフ形石器は長野県和田峠産の黒曜石製の茂呂型ナイフで、近畿地方初見例として注目を集めた。

縄文時代の遺跡を対象とする発掘調査は、府内各地で行われたが、全体として発掘件数は少ない。早期の資料としては、京都市北白川上終町遺跡で、押型文土器を伴う円形住居跡や集石遺構が検出されている。また、断片的資料ながら国道176号バイパス建設工事に伴って試掘された加悦町嗎岡遺跡でも、押型文土器と黒曜石剥片が見い出されている。来年度予定されている本調査に期待するところが大きい。このほか、日吉町天若遺跡で後期の土坑群、山城町堂ノ上遺跡・加茂町恭仁宮下層遺跡でもそれぞれ晩期の土坑が見つまっている。集落の一面に該当するものと思われる。

弥生時代

前期に属する調査成果として、加悦町蔵ヶ崎遺跡と亀岡市時塚遺跡の調査がある。蔵ヶ崎遺跡では、前期の溝・中期の水路などの遺構内及び包含層内から多量の前期の土器片が採取された。京都府北部出土の弥生前期の土器資料としては、質・量ともに他を圧して充実しており、今後の整理・研究の進展に期待が寄せられている。時塚遺跡では、府道の新設に伴い、溝・土坑を検出した。中期の集落に関する調査成果には、加悦町須代遺跡と山城町堂ノ上遺跡で、溝と円形住居跡がそれぞれ検出された。墳墓遺構では、綾部市青野西遺跡(第5次)で、10基をこえる方形周溝墓が検出された。調査地は、遺跡の南西部に相当し、この付近に中期の墓域が広がっていたことが判明した。高地性集落として知られている向日市北山遺跡では、中期後半に属する方形周溝墓5基が検出され、居住域と墳墓域とを合わせもつことがわかった。久美浜町豊谷遺跡は、堤谷古墳群の下層から新規に発見された台状墓である。2基検出されたうち、1号墓の第1主体(木棺直葬)から石槍1点、

京都府埋蔵文化財調査研究センター 平成3年度発掘調査実施遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	担当者	現地調査期間	概要
1	こくら野遺跡	集落跡	熊野郡久美浜町甲山	森島康雄	3.5.14～3.8.29	竪穴式住居跡、掘立柱建物跡
2	堤谷古墳群	古墳	熊野郡久美浜町永留	森 正	3.5.7～3.9.10	古墳4基、木棺直葬
3	野中城跡	城跡	熊野郡久美浜町永留	森 正	3.8.19～3.9.12	堀切
4	遠所遺跡群	製鉄炉・ 窯跡ほか	竹野郡弥栄町木橋	増田孝彦 岡崎研一	3.4.22～4.3.7	製鉄炉跡、鍛冶炉跡、炭窯跡、 須恵器窯跡
5	太田古墳群	古墳	竹野郡弥栄町和田野	増田孝彦 岡崎研一	3.5.1～3.6.7	遺構なし
6	通り古墳群	古墳	中郡大宮町口大野	石崎善久	3.5.8～3.10.28	円墳2基、木棺直葬
7	奈良岡遺跡	集落跡	竹野郡弥栄町溝谷	岡崎研一	3.7.1～3.7.6	弥生中期土器・木器
8	裏除遺跡	集落跡	中郡大宮町奥大野	岸岡貴英	3.8.19～3.10.9	竪穴式住居跡、溝、掘立柱建物跡
9	下畑遺跡	集落跡	与謝郡野田川町三河内	岸岡貴英	3.6.11～3.8.2	溝、柱穴、中世
10	蔵ヶ崎遺跡	集落跡	与謝郡加悦町明石	森 正	3.10.22～4.3.13	水田跡、杭列、矢板列、弥生前期
11	鴨岡遺跡	散布地	与謝郡加悦町後野	石崎善久	4.1.13～4.2.28	縄文土器、古墳、中世墓
12	高田山古墳群	古墳	福知山市庵我	小池 寛	3.5.7～3.8.23	方墳、須恵器、鉄刀、中世墓
13	細谷古墳群	古墳	綾部市下位田町	小池 寛	3.9.18～3.10.30	横穴式石室1基
14	天若遺跡	集落跡	船井郡日吉町天若	三好博喜	3.4.15～4.2.7	竪穴式住居跡、古墳後期
15	川向北1号墳	古墳	船井郡園部町小山東	柴 暁彦	3.5.7～3.8.9	横穴式石室、竪穴式住居跡
16	小谷17号墳	古墳	船井郡八木町本郷	野島 永	3.5.21～3.7.29	横穴式石室、須恵器、玉類
17	八木城跡	城跡	船井郡八木町本郷	鶴島三壽	4.1.8～4.3.6	石組遺構
18	堂山窯跡	窯跡	船井郡八木町本郷	柴 暁彦	4.1.8～4.3.6	遺構なし
19	池尻遺跡	散布地	亀岡市馬路町	田代 弘	3.8.19～4.1.27	溝、土坑、布目瓦、 弥生前期～奈良時代
20	鹿谷遺跡	散布地	亀岡市藤田野町	鶴島三壽	3.7.23～3.10.15	竪穴式住居跡、掘立柱建物跡
21	平安宮跡(社会保険)	宮殿跡	京都市上京区	引原茂治	3.4.15～3.5.21	近世土坑、緑釉瓦
22	平安宮跡(職安)	宮殿跡	京都市上京区	森島康雄	3.11.19～4.2.7	聚楽第跡、金箔瓦
23	平安京跡隣接地	都城跡	京都市南区	引原茂治	3.8.19～3.11.15	近世畑跡
24	東寺境内	寺院	京都市南区	引原茂治	3.6.10～3.7.15	築地側溝、濠跡
25	長岡京跡 (名神・向日)	都城跡	京都市伏見区	石尾政信 鍋田 勇	3.4.8～3.12.20	長岡京街路側溝
26	長岡京跡 (名神・下植野)	都城跡	乙訓郡大山崎町下植野	戸原和人 黒坪一樹	3.4.15～4.2.28	旧河道、祭祀跡、建物跡
27	長岡京跡 (名神・大山崎)	都城跡	乙訓郡大山崎町円明寺	岩松 保 石尾政信	3.4.8～4.2.28	山陽道側溝、竪穴式住居跡
28	長岡京跡(乙訓土木)	都城跡	長岡京市東神足	鍋田 勇	3.8.1～4.1.28	竪穴式住居跡、土坑
29	算用田遺跡	散布地	乙訓郡大山崎町円明寺	中川和哉	3.5.21～4.2.28	竪穴式住居跡、溝、土坑
30	木津川河床遺跡	集落跡	八幡市焼木	小池 寛	3.12.2～4.2.1	土坑、噴砂跡
31	内里八丁遺跡	集落跡	八幡市内里	竹原一彦	3.4.15～4.1.10	弥生後期水田跡
32	口仲谷古墳群	古墳	綴喜郡田辺町松井	竹原一彦	4.1.13～4.2.14	古墳
33	興戸遺跡	集落跡	綴喜郡田辺町興戸	伊野近富	3.10.1～3.11.26	水田跡
34	大切遺跡	散布地	綴喜郡田辺町東	小池 寛	4.2.3～4.3.7	弥生～古墳時代包含層
35	樋ノ口遺跡	散布地	相楽郡精華町山田	伊野近富	3.4.8～3.8.12	掘立柱建物跡、築地跡、奈良三彩
36	堂ノ上遺跡	散布地	相楽郡山城町北河原	野島 永	3.7.19～3.10.30	円形住居跡、方形住居跡、井戸、 弥生中期～奈良時代
37	恭仁京跡	都城跡	相楽郡山城町北河原	野島 永 小池 寛	3.11.6～3.11.22	遺構・遺物なし
38	燈籠寺遺跡	集落跡	相楽郡木津町燈籠寺	竹井治雄	3.6.3～3.7.15	方墳周濠、埴輪
39	西山遺跡	散布地	相楽郡木津町市坂	石井清司 竹井治雄	3.11.1～4.2.20	竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、 奈良時代古墓
40	西山塚古墳	古墳	相楽郡木津町市坂	伊賀高弘	3.7.17～4.2.20	円墳、埴輪、葺石、周濠
41	瀬後谷遺跡	瓦窯跡	相楽郡木津町市坂	石井清司	3.4.9～3.8.30	瓦窯跡、瓦塔、須恵器、瓦

石鏃22点が出土、注目を集めた。矢を射込まれた戦士の墓とも考えられるが、出土状態からは確証は得られなかった。このほか、向日市鶏冠井遺跡で方形周溝墓1基、福知山市高田山遺跡で集石遺構が見い出されている。高田山遺跡の集石遺構は、高田山2号墳の封土内から検出されたもので、墳墓遺構の残骸とみられる。後期の調査成果には、集落・墳墓・生産に関するものが見られるが、いずれも断片的な資料にとどまる。集落関係では、加悦町嗎岡遺跡で溝、園部町川向北遺跡で方形住居跡が検出された。墳墓関係では、野田川町屋敷ノ内C1号墓、同玉峠遺跡で台状墓の調査が行われた。八幡市内里八丁遺跡では、後期の水田遺構が上下2層にわたって検出された。3年度は下層の水田面の調査が行われたが、畦畔の残存部は比較的小範囲内にとどまった。

古墳時代

前期に属する遺構・遺物の検出例は比較的少ない。向日市塚ノ町遺跡で検出された庄内併行期の方形周溝墓1基、大山崎町算用田遺跡、田辺町大切遺跡で検出された布留式土器を伴う溝などを挙げうる程度である。

中期古墳の調査は、府内各地において実施され、それぞれの地域色をあらわす多種多様な成果が得られた。網野町離湖古墳は、日本海沿岸各地に点在する潟湖の一つ離湖を眼下に見下ろす丘陵上に営まれた中期古墳である。墳丘は、40m×30m前後の長方形墳で、外表施設としての埴輪を伴う。主体部は2基あり、長持形石棺と組合式木棺をそれぞれ直葬する。長持形石棺は、底石のみ原位置をとどめていて、その他の棺材は過去の盗掘時に破壊され大小の断片となって盗掘坑の内外に散乱していた。長持形石棺には、三角板鋌留短甲、刀、刀子、鏃が、組合式木棺には鏡、石釧、銅釧、堅櫛、勾玉、管玉、ガラス小玉がそれぞれ副葬されていた。年代は、5世紀後半代、日本海沿岸地域最大規模の前方後円墳網野銚子山古墳から2・3世代降る首長墓とみられる。丹後半島の中央部、竹野川の中流部左岸の丘陵地に位置する大宮町通り古墳群では、径20mを越える円墳2基と小規模な方墳1基の調査が行われた。丘陵頂部を占める1号墳は、径28mを測る大宮町内では比較的規模の大きい円墳で、木棺直葬の主体部内から枕に転用された鼓形器台と刀子が見い出された。丹後半島の西部に位置する久美浜町堤谷古墳群でも木棺直葬の小規模な方墳群の調査が行われた。伴出遺物は極めて乏しく、若干の土師器と鉄器を伴うか、または遺物を欠くのが通例である。同様の状況は、網野町生野内大谷古墳群でも確かめられており、古墳中期における丹後地方の在地系首長墓の一般的なあり方を示すものと思われる。丹波地方では、綾部市私市円山古墳の調査が行われた。整備工事に伴うもので、墳丘の西側斜面において埴輪列と葺石が追加確認された。兵庫丹波に近い和久川上流部に位置する福知山市カヤガ谷古墳群では、丘陵稜線上に並ぶ径10m内外の円墳9基の調査が行われた。木棺直

葬の主体部内に少量の鉄器を納め、墳丘頂部に初期須恵器を含む土器を供献する。由良川を眼下に見下ろす丘陵上を占める高田山2号墳は、先端部に位置する1号墳とともに、丹波地方に点在する方墳の良好な資料として従来から研究者の間でとりあげられることの多かった古墳である。広義農道の拡幅工事に伴い、墳丘の約半分が面的に調査された。長辺22m・短辺19mの方墳で、墳頂部中央の木棺直葬の主体部には直刀・剣・刀子・鏃を納め、墓壙上面には土師器・須恵器を供献する。須恵器樽形甕が出土している。私市円山古墳、高田山古墳群、カヤガ谷古墳群は、いずれも5世紀後半に成立年代を求めうるもので、私市円山古墳を頂点とするこの地域の支配構造の一端が明らかとなった。山城地方では、長岡京市開田古墳群、精華町平谷3号墳、木津町西山塚古墳等で調査が行われた。開田古墳群は、長岡京跡の下層から検出された古墳群である。方墳7基、墳形不明墳1基の計8基の墳丘部を削平された古墳が検出されている。埴輪を伴うものもみられる。平谷3号墳は、木津川右岸の丘陵上に営まれた径50m前後と推定される大規模な円墳だが、削平・流失が著しく、古墳本来の規模・形状を確定するのは極めてむずかしい状況を呈している。埴輪片・鉄剣、直刀が流土の中から出土した。5世紀後半代に属する。西山塚古墳は、木津町市坂の台地上に営まれた径26mの円墳である。二段築成され、埴輪・葺石・周濠を完備する。木棺直葬3基を内部主体とするが、上層で検出された2基は乱掘のため、出土に関する知見を欠く。下層で検出された中心主体には鉄剣等を伴うが、詳細については4年度の調査に譲る。築造年代は5世紀の末葉に属する。

後期古墳の調査成果にもみるべきものが多い。丹波・丹後地方では、6世紀前葉から中葉頃に属する、初現期の横穴式石室あるいは竪穴系横口式石室の調査がいくつか実施され、京都府北部における横穴式石室の導入の実態解明に迫る好資料が得られた。宮津市と野田川町との市町境に所在する霧ヶ鼻古墳群では、土取り工事に伴い、丘陵稜上に並ぶ10号墳から18号墳までの9基の古墳の調査が実施された。このうち、10号墳では径10m余りの墳丘に2基の石室が営まれていることが判明した。横穴式石室と竪穴系横口式石室を、主軸が直交する形「T」字状に設けたもので、年代は6世紀前半代とみられている。竪穴系横口式石室から横穴式石室へと移行していく流れを同一墳丘において確かめられる資料として研究者の間で重要視されている。大規模な製鉄遺跡として、全国の注目を浴びた弥栄町遠所遺跡の真ただ中にある遠所古墳群でも円墳2基(31・32号墳)の調査が行われ、うち1基は竪穴系横口式石室を内部主体としていることが確かめられた。亀岡盆地では、八木町小谷17号墳で、丹波地方最古の一群に属する横穴式石室の調査が行われた。径10m前後の円墳に北開口の石室を設ける。長さ2.1m・幅1.9mの正方形に近い玄室と幅0.7mの羨道とをもつ右片袖式の石室である。6世紀前半期に属する。山城地方の後期型首長墓の代

表例である宇治市宇治二子塚古墳は、過去数度にわたる発掘調査で、二重周濠をもつ墳丘全長120mの横穴式石室を内部主体とする前方後円墳であることが判明している。今年度は、後円部の段築が確認され、従来の墓調査成果と合わせて、墳丘の規模等が確定された。墳丘の平面形は、継体真陵といわれる大阪府今城塚と同形の縮小版であることが解明され、継体王朝と深くかかわる勢力の存在を推測させるに至った。出土した埴輪や須恵器の型式から類推される年代は、6世紀の初頭である。横穴式石室を内部主体とする群集墳の調査例としては、綾部市細谷古墳群、園部町川向北1号墳、京北町のほりお古墳などがある。細谷古墳群は、以久田野古墳群に隣接する後期群集墳で、10基前後の横穴式石室墳からなる。6世紀末葉から7世紀中頃にかけて築造・追葬されたもので、盟主墳とみられる3号墳は、比較的大きな石を用いて築かれた両袖式の横穴式石室を内部主体とし、銀象嵌文様のある大刀を伴う。川向北1号墳は、円墳3基で構成される群集墳中の1基である。墳丘は、径13mの規模で、部分的に列石を設けている。石室は、玄室の長さ2.7m・幅1.5mを測る左片袖式に属し、須恵器・土師器・鉄製武器・馬具などの後期群集墳に通有の遺物を伴う。6世紀末頃に属する。のほりお古墳は、径12mの墳丘に長さ6m、幅1mの無袖式横穴式石室を内蔵する。須恵器、土師器、鉄刀等が出土、6世紀末ないしは7世紀初頭頃の築造とみられる。宇治市大久保環濠遺跡の下層から後期の円墳2基が新たに発見され、広義の久津川古墳群を構成する一支群となることが判明した。円墳の周濠の一部をトレンチ内で確認したもので、削平等のため主体部構造は不明だが、周濠内出土の遺物から6世紀末頃に属することが確かめられている。

集落跡の調査例として、日吉町天若遺跡、亀岡市鹿谷遺跡の2遺跡で大規模な調査が行われたほか、綾部市青野西遺跡、大山崎町算用田遺跡、京都市中臣遺跡、山城町堂ノ上遺跡などでも部分的であるが、各時期に属する方形住居跡が検出された。天若遺跡の調査は、平成元年度から継続的に行っているもので、平成3年度は約6,900㎡を掘り28棟の竪穴式住居跡を新規に検出した。既検出のものと合わせると33棟となり、事業が完結する4年度末には、50棟前後を数える古墳時代後期の集落跡を完掘することとなる。当該期の集落の構造・変遷過程を知る数少ないモデルケースとなろう。鹿谷遺跡は、ほ場整備事業に関連して、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会・当センターの3者が試掘・本掘を行ったもので、総計約3,000㎡の発掘を行い、古墳時代後期の方形住居跡40棟以上を検出した。珍しい出土品として完形の製塩土器1点がある。青野西遺跡では古墳中期の方形住居跡9棟が検出され、青野・綾中遺跡群の中で空白であった時期を埋める新資料として注目された。

このほか、生産遺跡・祭祀遺跡の調査例として、京都市長岡京下層遺跡、田辺町興戸遺跡、久美浜町堤谷1号窯跡、大山崎町下植野南遺跡等がある。長岡京下層で検出された水

田遺構は、5～150㎡の方形ないしは長方形プランの小区画水田が22,000㎡にわたり検出された。遺構面の標高は、7.8～8.5m、山城盆地の中でも最低の標高値を示す遺跡である。興戸遺跡の一面から検出された水田遺構も同様の小区画水田の跡だが、調査面積が狭小でかつ伴出遺物に乏しいので、年代決定の決め手を欠いている。堤谷1号窯跡は、地下式の須恵器専用の窖窯である。古墳時代終末期、7世紀前半代に属する。下植野南遺跡では、土師器、須恵器、滑石製白玉などを土坑の内外に配置した古墳後期の祭祀遺構が検出された。検出地点は、小泉川の旧流路とみられる川跡に近く、水辺の祭祀の跡とみられている。

奈良・平安時代

飛鳥・白鳳時代に属する遺跡の調査としては、寺院跡・集落跡・瓦窯跡に関する新資料が集積された。亀岡市池尻遺跡では、府道新設に伴う試掘調査で、南北方向に走る素掘り溝1条が見い出され、重弧文軒平瓦を含む布目瓦片が多量に検出された。検出地点は大堰川左岸の微高地上に相当しており、白鳳創建の地方寺院跡の新規発見例となる可能性は極めて高い。集落関係では、舞鶴市倉谷遺跡、大山崎町算用田遺跡で集落の一部を掘り当てている。倉谷遺跡では7世紀中葉頃に属する竪穴式住居跡2棟のほか、8世紀代に属する掘立柱建物跡6棟以上が見い出されている。算用田遺跡でも7世紀の方形住居跡と土坑が検出され、乙訓地域にあっては比較的まとまった一括土器群が得られた。瓦窯跡関係では、八幡市平野山瓦窯跡及び久美浜町堤谷瓦窯跡の調査が注目された。平野山瓦窯跡は京都府と大阪府との府境線上に位置する瓦陶兼業窯で、枚方市・八幡市による調査で大阪四天王寺所用瓦の生産地であることが判明している。今回、遺跡の西南部で緊急調査が行われ、新たに2基の地下式窯跡が検出された。瓦窯・須恵器窯各1基あり、瓦窯は四天王寺創建瓦を焼成・供給していたことが判明した。年代は7世紀の初頭。堤谷2号窯は、半地下式有段窖窯で白鳳様式の瓦が出土した。近辺には白鳳期創建と推定される寺院跡は現在のところ確認されておらず、その供給先の特정이今後の研究課題である。

奈良時代の遺跡の調査では、宮殿跡・集落跡・寺院跡・窯跡等各種の遺跡がその対象となり、多くの新知見が得られた。加茂町恭仁宮跡の調査では、宮の東限を画するとみられる南北溝・柵列が確認され、宮域の確定に迫る重要な資料が得られた。集落跡の調査例としては、久美浜町こくばら野遺跡、京都市植物園北遺跡、田辺町興戸遺跡などがある。こくばら野遺跡では、7世紀の末葉から8世紀前半代に属する竪穴式住居跡11棟、掘立柱建物跡15棟が検出された。竪穴式住居跡が帯状に分布すること、掘立柱建物跡の規模・方位に規格性がみられること、竪穴式住居から掘立柱建物への移行が8世紀初頭頃に求めうること等の事実が確かめられた。植物園北遺跡では、奈良時代から平安時代初期にかけての竪穴式住居跡、掘立柱建物跡13棟、埋納遺構等が検出され話題となった。調査地点は、上

賀茂・下鴨両神社の中間点にあたるどころから、両社に仕えた神戸に関係する遺跡であると見られている。興戸遺跡では、古代山陰・山陽併用道と併行に走る直線溝が、総延長約70mにわたって検出された。奈良三彩小壺の出土等からみて、幹線道路に貼り付く官衙的性格を帯びた遺跡といえよう。木津町と精華町との町境にある樋ノ口遺跡では、掘立柱建物跡、築地に伴い瓦・奈良三彩・二彩瓦等の遺物が大量に発見された。奈良三彩・二彩の出土点数は100以上に及ぶ。遺跡の性格については、寺院跡とみる説と文献には見えていない未知の宮跡とみる見解がある。瓦窯跡の調査例としては、京都市大宅廃寺瓦窯と木津町瀬後谷瓦窯とがある。瀬後谷瓦窯跡では、8世紀前半の瓦窯・瓦陶兼業窯計5基の調査が行われた。珍しい資料として、鉛釉を施した瓦塔が灰原から出土している。

長岡京跡の調査は計57件行われた。宮域内での調査で最も顕著な成果が得られたものは、朝堂院西方官衙地区で行われた向日市長岡宮第267次調査である。2間×5間の南北方向に主軸をおく門跡の北東部と門から北へのびる築地が確認された。門跡基壇には凝灰岩製の地覆石5石が原位置をとどめていた。会昌門の西方にあたり、重要な官衙の東門とみられている。左京域内での調査で最大の成果を得た現場は、向日市市民プールの建設に伴って行われた向日市長岡京跡左京第265・277次調査である。左京南一条二坊十・十二町の東西一町南北二町の敷地内に7間×5間の正殿を中心に後殿(5間×3間)、脇殿(7間×2間)、八脚門(3間×2間)などの整然と配置された掘立柱建物跡群が発見された。正殿の建物跡は、京内最大規模を誇るもので、桓武天皇が延暦12年に内裏から移り住んだと文献に見える東院の跡とみる見解が強まっている。右京域の調査では右京六条二坊一町及び五条二坊四町で実施された右京第365次調査を代表例とする。西一坊大路と五条大路とが交差する十字路の西側の宅地部分で行われた調査で、五条大路の南、西一坊大路の西にあたる六条二坊一町の宅地では、十字路のコーナーに近い北西部に倉庫群らしい建物跡が配置されていることが判明した。一町域を占有する貴族層の宅地跡と推定される。その他の調査結果については、本誌連載の「長岡京調査だより」をもって代替する。

平安時代の遺跡では、宮殿・都城跡、寺院跡、窯跡等の調査で見べき成果があった。京都市平安宮跡では、中務省の北西部を画する築地が発出された。築地を横切る塙組みの暗渠排水施設が発見され、注目を集めた。地下鉄東西線建設に伴う調査では、平安京の東京極大路の路面のほか、神泉苑に伴う池・溝等の遺構が発出され、話題となった。京都市東寺境内では、北門の解体修理に伴う発掘調査と、慶賀門脇の警察官派出所改築に伴う調査が行われた。北門基壇の発掘調査では、平安期の築地と穴門の跡、鎌倉期の創建北大門の基壇と礎石、慶長期再建北大門の基壇の構造等が解明された。慶賀門南側の調査地では、鎌倉期の築地側溝と近世の濠跡を検出した。宇治市平等院では、鳳凰堂対岸部において園

池の旧状をさぐる調査が行われ、洲浜と礫敷き庭園の礫敷き面の一部を検出、鳳凰堂の正面には樹木はなく、宇治川対岸の仏徳山を望む往時の姿が明らかとなった。下鴨神社境内の森の発掘調査では、古今集などにみえる「奈良の小川」「瀬見の小川」が遺構として確認された。川跡の年代は平安時代後期に属する。平安京から山陽道諸国に向かう幹線道路西国街道の西側を調査した大山崎町百々遺跡(長岡京跡右京第349・367次)では、9世紀から10世紀頃の西国街道の西側溝が見つかり、復原される道路幅は13~14mとなることがわかった。京都市栗栖野瓦窯跡では、平安前期の緑釉瓦、二彩陶器を焼成した窖窯の調査が行われた。奈良三彩を含め多彩釉陶器窯の初見例となる貴重な成果である。

中・近世

城郭関係の調査が中心に行われた。このほか、京都市内や宇治市内では、近世の町屋跡の発掘調査が精力的に進められている。

中世城郭の調査例として、丹後の野田川町香久山城跡、丹波の八木町八木城跡、亀岡市並河城跡、山城の南山城村大河原城跡などの調査がある。八木城は丹波守護代内藤氏の居城で、京都縦貫道建設に伴い山麓部で試掘調査を行った。本格的な調査は平成4年度に実施する予定である。並河城跡は、大堰川右岸の段丘上を占める平地式の中世城郭である。堀・土塁・礎石等の遺構が極めて良好に検出された。近世城郭の調査の中で注目すべきものとして、京都市聚楽第跡の調査が挙げられる。本丸の東堀跡に相当する地点で実施され、本丸側から埋め立てられたことを示す、斜め堆積した土層から600点を越える大量の金箔瓦が発見された。聚楽第跡を対象とする考古学的調査研究の第一歩を記す調査となった。宮津市宮津城跡では、本丸の石垣の調査がなされ、細川氏による創建期の石垣と京極氏による再興時の石垣が重複した状態で検出された。細川藤孝の隠居城として築城された舞鶴市田辺城跡では、天正年間建立の天守台の石垣が発見され、話題となった。穴太積みによる石垣と胴木が検出された。京都市伏見城跡では豊臣秀吉に仕えた片桐且元の屋敷跡の調査が行われ、東西長54mの長大な建物跡が検出された。下級武士の住宅かとみられている。

経塚の調査例には、福知山市高田山経塚と大宮町通り経塚がある。いずれも古墳の墳頂部で上層遺構として検出された。高田山経塚では、瓦質土器の外容器の中に黒漆塗竹製経筒を納めた経塚2基のほか、墳墓・土坑が見い出された。青白磁・瓦器碗・北宋銭・東播系須恵質甕を伴う。13世紀前半。通り経塚は、通り1号墳墳頂部で2基検出されたもので、土師質円筒形の土器を納めている。町屋跡の調査では、京都市中京区で江戸時代前期の和鏡の工房跡が発見され注目を集めた。鋳型・ルツボ・フイゴ羽口が多量に出土した。京都市南区御土居跡では、御土居の濠を調査し、江戸時代の木製品が多量に出土した。

(おくむら・せいいちろう=当センター調査第2課調査第2係長)

墓域の中の集団構成(前編)

—近畿地方の周溝墓群の分析を通じて—

岩 松 保

1. はじめに

近畿地方以東の弥生時代の一般的な墓制は周溝墓^(註1)と認識されて久しい。近年の大規模開発に伴って、墓地全体の様相がよくわかる発掘調査例が増えてきた。そのため、墓域内の群構成を検討する視点が導入されるようになった。墓域内で見られる集団関係は、ムラの中における生前の集団関係を如実に反映していると考えられるからである。

周溝墓は通常、ある範囲の「墓域」の中に群集して築造されている。各遺跡の墓所のあり方をみると、滋賀県服部遺跡の360余基の周溝墓や山梨県上ノ平遺跡の100数十基の周溝墓で一つの墓所を形成する場合、瓜生堂遺跡や安満遺跡のように居住域のまわりに二～三の墓所に分かれて各墓所が二～三十基の周溝墓で構成されるもの、一集落の墓所が一～数基の周溝墓で構成されるものまで様々である。これらの差異は、集落規模の大小、共同体の発達段階の差などに起因するものと考えられる。そしてさらに、集落内の集団関係が周溝墓という墓制に表出されるあり方に、「地域性」が関係しているのであろう。

これら各集落における墓域のあり方の差異を統一的に把握するのが小論の第一の目的である。そのために見かけの様々な様相を捨象し、本源的なあり方としての「モデル」を設定する手法が有効であろう。この小論では、墓群を構成する最小単位である「個人の墓」からその総体である「墓域」までをその群集の意味を考慮して数段階の位相に分けた上で、近畿地方の各時期における墓域のモデル化を図りたい。そしてそのモデルにおいて、それぞれのレベルの築造集団の変遷を考察することにより、墓域内の集団構成の変遷を指摘し、弥生時代から古墳時代への時間の流れの中で周溝墓の被葬者と古墳の被葬者との間に、集団間の格差がどのように生じ、進展していったかの階梯を明らかにしたい。

2. 墓域の基本構造

1) 墓域構成の研究略史

周溝墓の群構成に早くに着目したのは水野正好である(水野1972)。水野は「方形周溝墓が、しばしば接し合い、時には周溝を共有するような関係で、次々と列状に、群列をなし

数基が一群を形成していく」事実を「一家族が、時間的に継起して、数世代にわたって家族墓を営んだことを示している」と指摘した。水野のこの考えは周溝墓群の基本的な評価となり、その後の墓制研究の指針となった。

近年、周溝墓の墓群構成について注目すべき論考が発表されている。都出比呂志は周溝墓の累世的な集合を「ユニット」、「ユニット」の集合体を「支群」とし、群構成の基本的な考え方を提出した(都出1984)。都出の最近の論考から引用すると、低墳丘墓群(=周溝墓など)は「墓道ともいうべき空閑地を境界として三～四の支群に分かれ、計画的な配置が認められるだけでなく、さらにこれら支群の内部を分割する原理がある。(中略)互いに周溝を接して連結しつつ順を追って連続的に築造された三基前後の方形低墳丘墓が一つの単位になっていることが判明する」とし、「これらは世代を異にした世帯が二～三世代にわたって累世的に営んだ墓域」と考え、「この三基前後の単位が数単位集まった支群の一つ一つ」を世帯共同体の一単位に相当するとまとめた(都出1989)。都出の唱える「支群・ユニット」による「墓域分割原理」とも言うべき考えは、墓域構成に関する研究の現時点での到達点を表わしている。中山誠二は都出と同じく、血縁の紐帯の強い単位でつくられた累世墓を「単位群」とし、これが集合して「墓群」を構成するとした(中山1987・1989)。墓群と集落のあり方から、墓群独立型、墓群集合型、墓群分散型の三類型を設定した。岸本一宏も同様に、「方向を同一にしたり、溝を共有したり、接」ってグループをなしている周溝墓を「小群」とし、そのまとまりを「群」と捉えた(岸本1988)。そして、周溝墓の埋葬単位を有力家族と考え、小群は有力家族が順次築造していったものとした上で、墓群構成から集落構成を推定し、単一の小群で墓域を構成するものを小規模集落とし、それを単位集団の集落と考えた。さらに、複数の小群で構成される集落を中規模集落とした。墓群のあり方が「百m程度から数百mの距離をおいていくつかの群に分かれているもの」を大規模集落とし、墓域のあり方の比較から中規模集落がいくつか集まって大規模集落を構成すると考えた。

これらの論考は、一旦、墓群を構成する「単位」にまで分解し、その上で、その「単位」によって墓群を再構築する手法を用いて、墓域の類型化=モデル化を試みている。この手法は集落規模の大小や墓域の多様な様相にとらわれることなく、本質的な差を際立たせるのに有効である。中山や岸本は墓域内の群構成の分析から、当時の社会構造の復原にまで論を展開した。

2) 「墓域」を構成する「墓」の概念

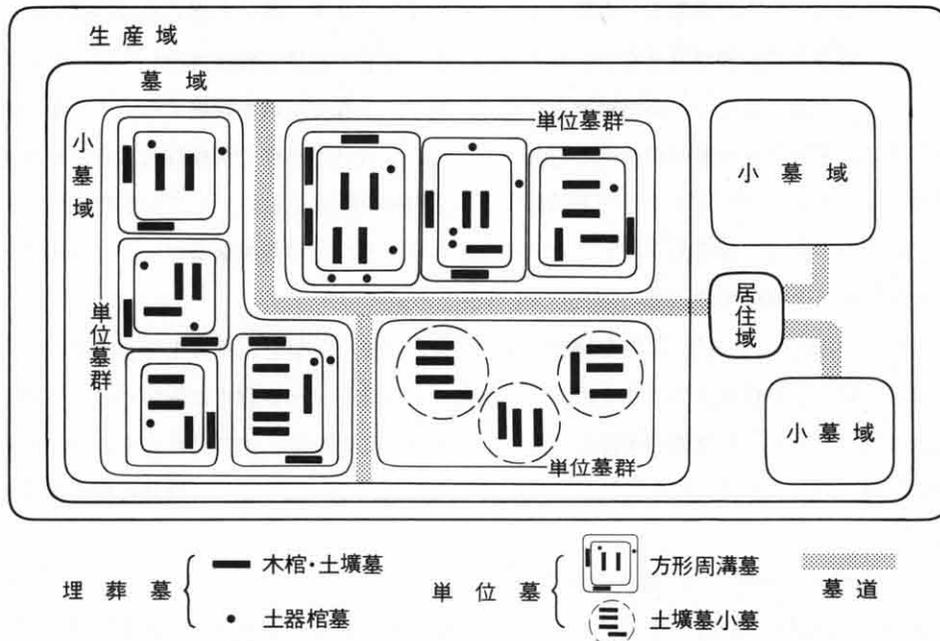
上述の「墓域分割原理」を敷衍するには、前提となる造墓原理が必要である。それは、

①小集団毎に墓域内の「占有地」の割り当てが墓道・空閑地を介して当初から計画的に行

われた、または、②小集団内の結合紐帯が強いがゆえに、墓道・空閑地を隔てて、近接して造墓を繰り返した結果、①と同等の原理が暗黙の内に働いた、のどちらかの前提となる原理である。これらを実際に遺構・遺物をもとに考古学的に実証するのは不可能であろう。各遺跡の墓所をみると、周溝墓群の間に帯状に連なる空閑地が認められること、そしてそこに「陸橋部」がとりつく例が多いのでその空閑地は「墓道」と考えられること、墓道に区画された空間内には連結して連なる周溝墓群が認められることを状況証拠として、造墓を行う際に①または②の原理が働いたとしたい。

筆者は墓群の構造を五段階の位相に分解し、それぞれを次の語句で呼称して、集団墓構成の基礎的概念に充てることとしたい。以下のように細分化して定義することにより、多義的に使用される「墓」・「墓域」・「群」・「小群」・「大群」などの語句の使用が避けられ、どのレベルの墓・墓群を指し示すかが文中で的確に判断できる。加えて、墓・墓群を細分化した概念を導入することで、各レベルの墓・墓群での格差・時期差・地域差などを子細に検討しうる環境を提供するものとする。以下の各語は主として近畿地方の弥生時代中期の様相に沿って説明している。

①埋葬墓—個人墓とも言うべきもので、個人が実際に葬られ、その被葬者が埋葬されるために最小の範囲に設けられた墓をいう。周溝墓等の台状部や溝内に葬られた埋葬主体とほぼ同義であるが、これのみにとらわれずに、周溝墓・台状墓外の土壇墓や木棺墓・土器



第1図 墓域モデル図(弥生時代中期)

棺墓も含めて考える。埋葬墓は墓地・墓域を構成する最小の単位である。

②単位墓—複数の埋葬墓が有機的な関連をもって配置され、空間的には小区画を占めるハカで、その被葬者集団の「基本単位」を表出していると考えられる。溝や墳丘により「物理的」に他と区画した周溝墓・台状墓がその典型である。溝等による区画を伴わない土壙墓群や土器棺墓群においても、方位や並び・群集状況に有機的な関連が復原されるものが見られる。これらもまた、その群集状況に「精神的」な区画が認められ、ある集団の単位を表出していると考えられるため、単位墓と認定される。単位墓を築造し、埋葬・被葬される集団(以下この集団を「単位墓集団」とする)は社会的な階層関係や血縁関係をその結合原理として有していると考えられる。周溝墓など、血縁関係を有する集団(=家族)の単位墓は、一世代内における家族成員の埋葬墓が累積したものと言える。

③単位墓群—数基の単位墓が有機的な関連をもって群集するものをいう。周溝墓の場合、周溝を共有したり、接したりして「列状」に連なるものが認められる。また、台状墓の場合、尾根の上に経時的に築造されていくものが多い。これらは、ある単位墓集団が単位墓を累世的に造り、その結果累積した累世墓群と捉えられる。

④小墓域—近畿地方の大集落——大阪府瓜生堂遺跡や安満遺跡、東奈良遺跡、京都府神足遺跡などでは、居住域の周囲に複数群の単位墓群が数ヶ所に分かれて分布するが、その一つ一つを小墓域とする。小墓域は複数単位の単位墓群で構成されていることから、数単位の単位墓集団で占有された墓所と考えられる。この小墓域を占有し、営んだ複数単位の単位墓集団を「小墓域集団」と呼称する。さて、小墓域を構成する単位墓(群)の組み合わせにより、単一型と混在型とに分けられる。前者は単一形態の単位墓で構成され、後者は複数形態の単位墓が混在している。

⑤墓域—居住域・生産域・山林など広い意味の集落を構成する要素のうち、埋葬墓・単位墓が造られる区域をさす。概念的な意味合いが強いもので、基本的には居住域の外縁部を占め、生産域の内側にある。墓域には単独型と複数型がある。単独型は一小墓域でそのムラの墓域を形成するものであり、岸本の考えるように(岸本1988)、中小規模の集落に位置づけられよう。複数型は複数個の小墓域で墓域をなし、大規模集落と捉えられ、これはさらに二タイプに分かれる。それぞれの小墓域が居住域のまわりに分散して各々が独立しているもの(分散型)と複数の小墓域が一ヶ所に集まっているもの(集合型)とがある。単独型と集合型の見極めは難しいが、各遺跡の例から、単位墓群が10群程度以下を墓域単独型、それ以上を墓域集合型とできよう。

3)各ハカ・墓群における格差の表出

個人(=埋葬墓)からムラ全体の墓地(=墓域)までを五段階の位相に分解した。ここ

では、周溝墓から古墳へとつながる階梯を明らかにする前段階として、各レベルの墓・墓群の中で階層差がどのような形態・様相をもって表出しているかを見ておきたい。

埋葬墓レベルでの階層差として大きな指標となるのは副葬品の有無と多寡である。しかし、弥生時代の「周溝墓制」の下にあっては副葬品はほとんどなされていないので、有意的でない^(注6)。実際に格差を見いだせるのは埋葬施設の差である。埋葬墓の棺施設には、木棺・土壙・土器棺などがあるが、これら棺の差異を年齢差と捉える考えがある。田代克己は瓜生堂遺跡の2号周溝墓を分析し、成人は木棺、乳幼児土器棺、小児から未成年は土壙墓に葬られるとした(田代1982)。土器棺はその遺存人骨が乳幼児のみであり、しかも洗骨などの再葬墓を想定しない限りその棺の大きさから乳幼児以外には供されなかったと考えられる。その意味では棺の差は年齢差とする一つの根拠たりえる。しかし、大阪府山賀遺跡や加美遺跡・鬼虎川遺跡の周溝墓では木棺に納められた乳幼児の骨が検出されている。また、鬼虎川遺跡第30次調査では、周溝墓外の土壙墓(中期)内からは推定年齢が20歳前後から40歳以下程度の成人の人骨が検出されており(多賀谷1988)、明瞭な年齢差を棺の差異に見いだせない。実際には、単位墓集団の「格」(=階層差)に応じて、「全員木棺」→「成人のみ木棺」→「全員土壙」というように、単位墓集団毎での棺の使用法が決まっているのであろう。田代の指摘や乳幼児の土器棺は、単位墓集団内での年齢差を「棺の差」で示す例と考えられ、それが全てではなく、過大に一般化すべきではない。単位墓集団内における年齢による「棺の差」を認めた上で、基本的には、単位墓集団の「棺構成の差」は単位墓集団の階層に基づくものと捉えるのが妥当と考える^(注7)。

単位墓レベルで見られる格差には、まず、溝や盛土で他の集団と隔絶する外表施設を設けているかいないかの点がある。単位墓はすべからず、生前からのある結合原理により近接して群集しているが、特に溝や盛土により空間的に一定面積の「占有」を行うことは、その集団の結合紐帯の強さを背景に他集団を自集団から「排斥」することである。言い換えると、他の集団に対して自集団の紐帯の強さを「宣言」することである。筆者は少なくとも、弥生時代中期の周溝墓はムラの成員「全員」が葬られるべき基本的な墓制と考える^(注8)が、そこに一部、周溝墓に葬られない集団が存在する。そういった集団の成員は、溝や盛土により一定範囲を区画した空間を「占有」することを「制限」されたと考えるがゆえに、社会的に下位に位置した集団と推定する。具体的には、宮之前遺跡、瓜生堂遺跡や神足遺跡などの周溝墓を築造する単位墓集団と周溝墓を築造しない(できない)単位墓集団とに分かれる事実である^(注9)。それぞれの単位墓は累世的に累積して単位墓群をなしていることから、周溝墓を造る・造れないの関係は、数世代にわたって保持されたものと判断される。ゆえに、この差はその単位墓集団の社会的に「固定」された差を示すものと考えられる。

さらに、同種の単位墓と比較して、質的・量的な差が認められるかどうか、の観点にも格差を見いだせる。量的な格差は次のように考えられる。単位墓が生前のその集団の社会的・数的な大きさを十分に考慮にいれた上で占地を行っているのならば、単位墓の占める面積の大小もまた階層的な所産と捉えうる。それは、稲作や狩猟・採取にたよった彼らの生活にあっては、食糧獲得はその担い手の数に大きく依存すると考えられるからである。加えて、それらの多人数の人間を養うことが可能である程度にまで、一定した食糧確保の裏打ちがあった、すなわち、社会的な地位が上位であったともいえよう。^(注10) 単位墓の質的な格差としては、それを構成する埋葬墓群に有力な埋葬墓を内包しているかどうか、がある。副葬品を有する埋葬墓を含んでいることは言うに及ばず、単位墓に占める「主たる棺」の優劣もまた単位墓相互間の質的な格差として指摘できる。周溝墓の台状部や周溝内、溝外埋葬墓で、一部の埋葬墓が木棺を使用しているのは、上述のように、各単位墓集団内での格差であり、単位墓集団を越えたところにある階層差ではなからう。しかし、加美遺跡Y1号墓にみられるように、ある単位墓が他の単位墓に卓越して木棺のみを棺として採用する場合には、そうでない単位墓と比較して、優位性を有する集団のものと考えられる。

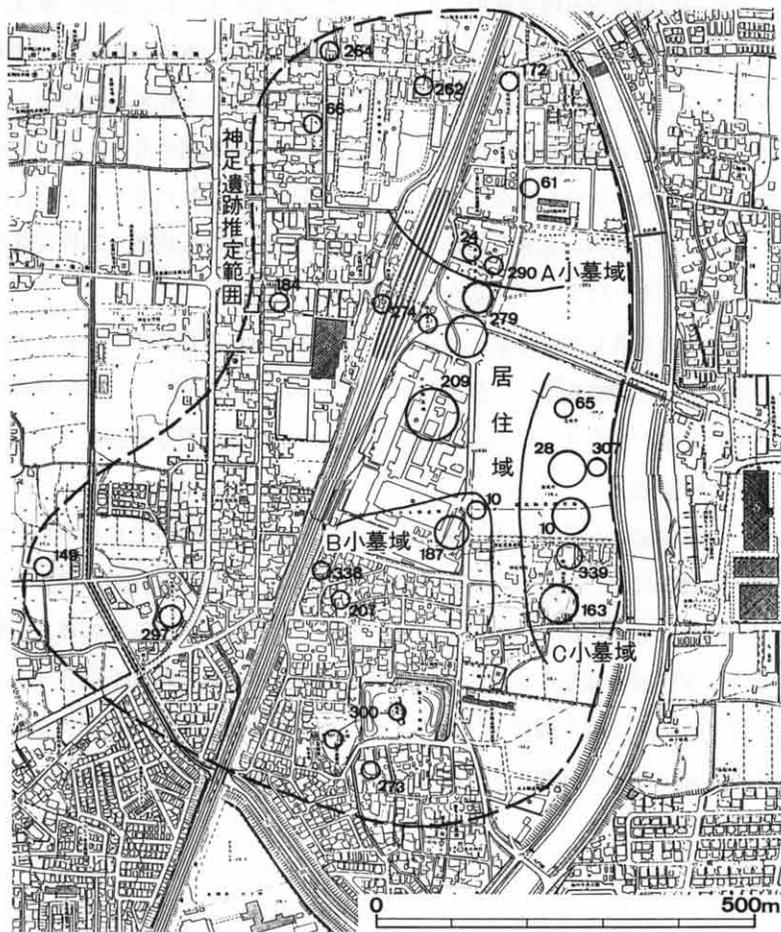
単位墓群は単位墓の累世的な集合体であるので、単位墓のそれに準ずるものと扱える。

小墓域にあっては、他の小墓域と比較して、上述した優位な単位墓・単位墓群ばかりで構成されているか、または含んでいるかで格差が見られる。

以上、概説したのは各レベルの墓・墓群相互の間で見られる差異で、いわば横列の関係の中での格差である。階層差は、下位のレベルの墓・墓群が上位のレベルの墓群の中で占める存在形態にも表出される。いわば、縦列の関係の中に見いだせる格差である。この点でも検討が必要である。

周溝墓などの単位墓は、通常、土器棺や土壙墓・木棺墓などの数基の埋葬墓で構成されており、広い年齢層にわたる多人数が埋葬されていることから、血縁的な関係を結合原理とする「家族墓」と考えられている。しかし、単独の埋葬墓によって単位墓が完結している場合、それは家族墓ではなく、個人墓と認定される。本来、血縁的な関係を有する集団を単位に構成されていた単位墓が、社会の進展と共にその血縁集団が階層的な秩序に組み込まれ、その結果、集団から個人が突出したために個人墓が成立すると考えられる。そのため、単位墓を構成する埋葬墓の単複——単位墓が家族墓的であるか、個人墓的であるかは厳しく分けられなければならない。一方で、複数の埋葬墓があったとしても、その結合紐帯が「社会的」な様相を示す場合には家族墓とは呼べまい。ある階層や社会的な地位をその結合紐帯としていることから、家族墓に対して、「階層墓」・「社会墓」とも呼称すべきものである。

ついで、小墓域に占める単位墓・単位墓群のあり方で、縦列に現れる格差は、一単位墓群で一小墓域を形成する場合に見られる。集団関係で言い換えると、一単位墓集団が一小墓域集団と同等であるという集団関係の中に、集団間の格差が指摘できる。小墓域集団は複数の単位墓集団により構成されるのが通有であるが、階層性の高い社会に発展した段階においては、単一の単位墓群で一小墓域を形成するであろう。従前であれば、他の単位墓集団と共に小墓域を占有していたのが、それらの単位墓集団の社会的な地位の相対的な低下に伴って、ある単位墓集団の優位性が確保され、他の単位墓集団とは別に単独で小墓域を独占するようになったと考えられる。この極端な場合には、首長クラスのみ単位墓群で小墓域・墓域を独占するものであるが、実際にはその他のムラの成員が葬られるべき墓地——共同墓地が存在したのである^(註1)。集落規模が十分に小さい場合にも、一単位墓群＝



第2図 長岡京市神足弥生ムラ分布図(拠 岩崎1991)
数字は長岡京跡調査次数番号

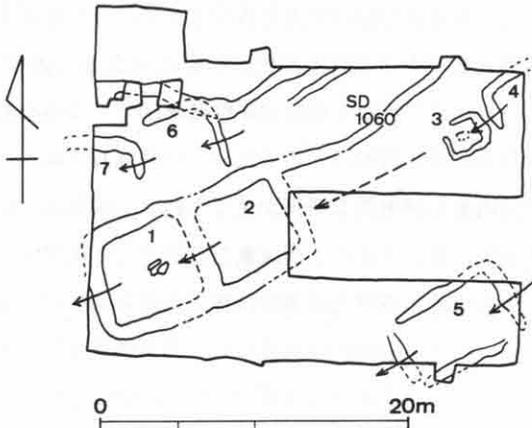
一小墓域の関係が成り立つが、これは別である。

3. 墓域構造の具体相

1) 弥生時代中期の様相

前節で設定した各墓・墓群の具体的な様相を京都府長岡京市神足弥生ムラの墓域内の集団関係で検討を加えつつ、先の語句に補足説明を行おう。

神足遺跡はJR西日本鉄道の神足駅を中心に南北約1km、東西約600mの低位段丘上に分布している。現在までに30次に近い発掘調査が行われており、集落の様相が判明しつつある。それによると、神足弥生ムラは主としてⅡ期からⅣ期にかけて営まれたムラで、玉造りや石器生産が盛んに行われており、乙訓郡内の拠点的な集落の一つと考えられている。集落の中央には、竪穴住居・掘立柱建物などが建ち並ぶ居住域、その周縁に周溝墓を中心とする墓域が広がっている。集落推定範囲の外縁部にあたる低位段丘縁辺部や段丘下は遺構の密度が低く、居住には供されず、水田などの生産域が広がっていたものと想定されるが、現在までのところ発掘調査では確認されていない。居住域の周囲の墓域は周溝墓等の群集のあり方によりA～C群の三群に分けられ、それぞれが小墓域と認定される。神足弥生ムラは三つの小墓域に分かれる複数型で、分散型の墓域構成をとる。A群・C群は主として周溝墓で構成される単一型の小墓域である。B群は周溝墓群と土壘墓群が明瞭に分かれて作られ、周溝墓と土壘墓の共存する混在型の小墓域となっている。小墓域の墓群のあり方を右京第10次東地区の調査地を例に見てみよう。ここでは七基の周溝墓が検出されており、周溝内より、3・4・5号墓がⅡ様式、1・2・6号墓がⅢ様式の土器が出土しており、おおむね東から西に向けて周溝墓は築造されたことが復原できる。さて、西群の周溝墓(Ⅲ期)のうち、1号周溝墓と2号周溝墓はSD1060により北辺が連結している。久保哲正はこのSD1060に対して「周溝墓の存在しない地点から伸びて来ているものであり、周溝墓の築造に際しての計画性や占地に対する規制」があったことを指摘する(久保1986)。久保の指摘とともに、このSD1060の北側には6号・7号周溝墓がL字形に「開いて」造ら



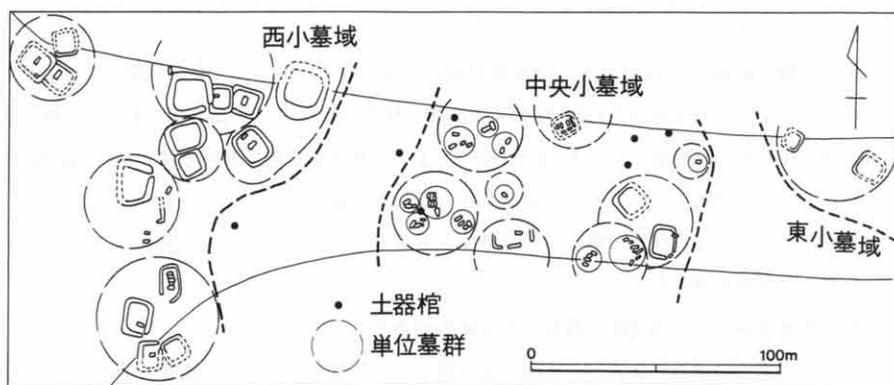
第3図 神足遺跡右京第10次東地区周溝墓群
(拠 久保・山本1980)

れていることから、溝に沿って連なる北側の細長い空地は墓道として利用されたのであろう。そうすると、西群の周溝墓群はSD1060を挟んで、北群と南群で二分できる。東群(Ⅱ期)においても、小形で近接して造られた3・4号周溝墓と空地(墓道?)を隔てて大形の5号周溝墓とに二分できる。これら東・西群の中の小群は、時期が同じであることや強く「占地」を意識しているので、それぞれが異なる単位墓群と認定できる。3号周溝墓と4号周溝墓の間には空地が認められるが、SD1060が北東に掘削されて伸びていることを重視すると、第3図中の矢印のように単位墓の築造の流れが復原され、大きく三単位墓集団の墓所であったことが推測できる。

単位墓は神足遺跡の場合、周溝墓と土壙墓群がある。周溝墓は各小墓域の主体をなす墓制で、土壙墓群は右京第10次西地区の調査で検出されている。この地区の土壙墓群も数基を単位に群集しており、単位墓をなしている。周溝墓の群が累世的に造られていることから、これらの土壙墓群も同時期の複数群の単位墓が分布するというよりも、ある家族の単位墓が累世的に累積した結果の単位墓群と見るのが妥当であろう。

神足弥生ムラの墓域は、三群以上の小墓域で構成されている。すなわち、ムラを構成する人々は大きく三小墓域集団以上に分かれていたといえる。さらに、各小墓域は数群の単位墓群が集まって構成されている。弥生時代の周溝墓や土壙墓群などの単位墓の結合範囲は血縁を有する集団の範疇に収まると考えられるので、単位墓群は血縁関係を有する単位墓集団が累世的に蓄積した単位墓の「群」と考えられる。各小墓域はそれぞれ血縁関係を有する数群の単位墓集団が墓地として利用していたのである。小墓域を構成する単位墓集団間でみると、小墓域Bにおいて周溝墓を築造する単位墓集団と築造しない単位墓集団に分かれており、他の小墓域の様相とは異なる。これら区画の有無などの単位墓の種別の差はその被葬者の出自の差を表すものではないと考える。もし、無区画墓が他所出身者、周溝墓がそのムラの出身者だとすると、周溝墓に供献される各地域の土器が説明されないし、さらに出自の異なる複数の単位墓集団で一つの墓域を形成するのも理解しえない。この単位墓の差は階層差と考えたい。小墓域Bでは、小墓域集団内の単位墓集団間に区画墓・無区画墓の階層的な格差が見てとれ、小墓域A・Cを占有した小墓域集団では規模・埋葬人員数の差こそあれ、周溝墓を墓制として採用する点において単位墓集団は等質である。

大阪府池田市宮之前遺跡は神足遺跡と同様に、周溝墓と土壙墓が混在して墓域を構成している。宮之前遺跡は集落の北半部が調査されており、発掘調査域内では三つの小墓域に分かれる。西小墓域はⅡ期からⅣ期にかけて造墓が行われ、東小墓域はⅢ期に造営され、ともに主として周溝墓を単位墓として採用する単一型である。周溝墓は二～四基で単位墓群をなし、西小墓域では六群、東小墓域には一群の単位墓群が分布している。中央の小墓



第4図 宮の前遺跡墓域配置図(拠 原口1977)

域は木棺墓・土壙墓と周溝墓で小墓域を形成する混在型である。周溝墓は三群の単位墓群に分かれ、木棺・土壙墓は一〜八基で単位墓を構成し、11単位の単位墓に分けられる。そして、11単位の単位墓は大きく三単位墓群に分かれる。^(注13) 神足遺跡では狭い範囲のため不明瞭であった土壙墓群の構成がよく分かる例である。中央小墓域の周溝墓群はⅢ期の造営になることと、木棺・土壙墓群周辺の竪穴住居はⅢ期のものであることから、少なくとも住居の廃絶後からⅣ期までの間に、「無区画墓」群と周溝墓群とが並存して小墓域を構成する集団関係が成立したと考えられる。

(以下、次号)

(いわまつ・たもつ=当センター調査第2課調査第4係調査員)

注1 小論では方形周溝墓・方形台状墓を「周溝墓」・「台状墓」と表記したい。周溝墓には方形周溝墓や円形周溝墓などがあるが、「方形」・「円形」は周溝墓の形態上の属性であり、以下の議論の中で質的な差を表すものではないと考えるからである。

注2 下記で規定していない墓・墓群・墓所・墓地などハカを指す語は、それぞれ慣習的に利用されている意味で使用する。

注3 古墳群においても同様な捉え方ができるものとする。

注4 これは弥生時代中期にのみ限ったことで、後述のように、階層分化が進んだ場合には、ムラの首長クラスのみが墓域を独占するであろう。

注5 後述のように、分散型の宮之前遺跡中央小墓域では八群の単位墓群で構成されており、北と南の未調査地を勘察すると、一小墓域は10群程度の単位墓群で構成されているであろう。

注6 辻本宗久は着装品も副葬品と考えているが(辻本1987)、着葬品は生前から個人が身につけていた装身具であり、副葬を「個人の死に際して特別に器具・調度などを遺骸と共に埋葬する」という意味で捉えると、副葬品とは扱えない。

注7 これは周溝墓を築く・築かないに対応する単位墓集団の階層差ではなく、異なった次元で律さ

れる差であろう。

- 注8 滋賀県服部遺跡では360基以上の周溝墓が検出されている。さらに、春成秀爾によると東大阪市瓜生堂遺跡では墓地区の1/5程度の発掘面積で50基の周溝墓が確認されており、高槻市安満遺跡では87基が調査されている(春成1985)。また、長岡京市神足遺跡では39基の周溝墓が確認されている(岩崎1991)。これらが墓域全体の方形周溝墓の数ではなく、その一部であることを考えると、「有力世帯」の墓としては多すぎる奥津城の数量であり、周溝墓はムラの一般成員を葬った墓制と考えたい。
- 注9 他に瓜破遺跡、東奈良遺跡、郡家川西遺跡等がある。
- 注10 基本は本文中の通りであるが、実際の単位墓では「分家」や家長の早死等の要因で、周溝墓の大小・被葬者数の多寡と社会的地位がイコールにはならないものが多いであろう。
- 注11 この共同墓地もまた多くの単位墓集団が埋葬墓をつくる小墓域の一種であるが、その意味をそこなわないためにも、共同墓地と表現する。これは後述のように遺構として確認できるもの他に、遺構として残らない形態——風葬・水葬等があったと考えたい。
- 注12 本来ならば「Ⅱ様式の土器が用いられた時期」とすべきであるが、煩雑さを避けるため、様式以下を略して「Ⅱ期」と表す。
- 注13 土器棺墓・土壙墓は住居に近接して埋葬されるものがあり、すべてが墓域に埋葬されたとは言えまい。

平成3年度発掘調査略報

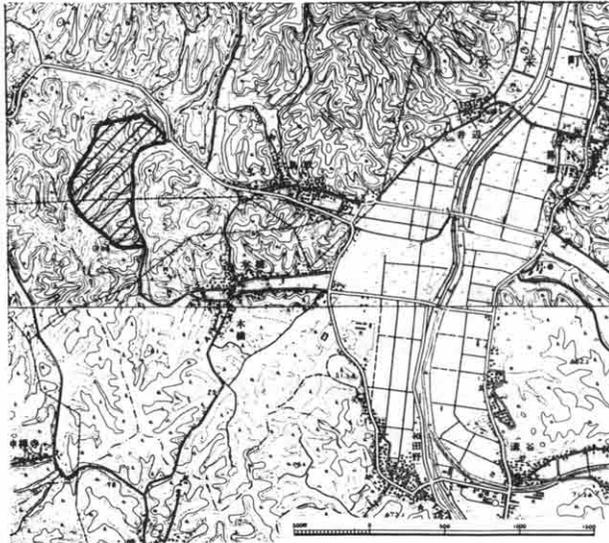
20. 遠所遺跡群

所在地 竹野郡弥栄町木橋小字遠所ほか
 調査期間 平成3年4月22日～平成4年3月7日
 調査面積 約60,000m²(調査対象面積)

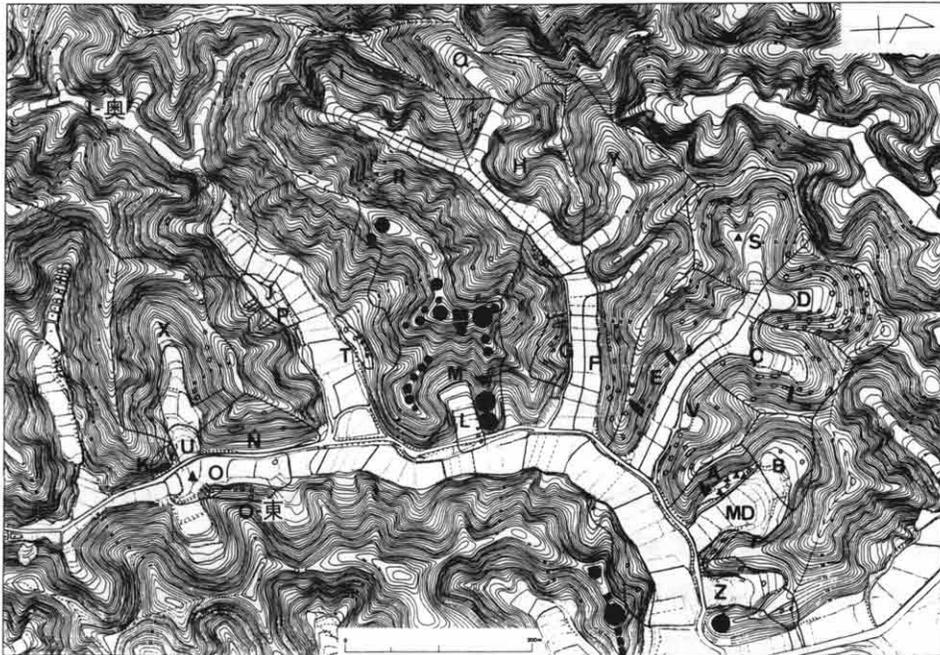
はじめに この調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の鴨谷団地造成工事に先立ち、同局の依頼を受けて実施したものである。遺跡群は、弥栄町の西端、網野町との町境に位置し、ニゴレ古墳(5世紀中頃の築造)南側の谷奥に、800m×600mの範囲で広がっている。

遠所遺跡群は、遺跡群中央に位置する遠所古墳群の調査(昭和62・63年度調査)が起因となって、製鉄炉・須恵器窯・炭窯・建物跡など各種の遺構を確認し、製鉄遺跡として調査を行ってきた。平成2年度までの調査から、奈良時代後期においては原料(砂鉄)―製鉄―精練―鍛練―製品の一貫した作業を行っていたことが確認されている。確認した遺構・遺物からは、5世紀から13世紀にかけて人々がこの地で活動しており、丘陵斜面や谷部からは、さまざまな作業や生活の痕跡などが確認できた。また、弥栄町には、「芋野」・「井辺」など、鋳物師との関係を考える上で注目できる大字名がある。

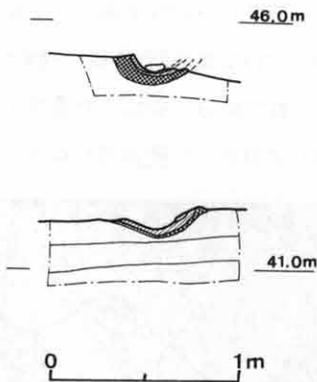
今年度は、原料から製品までの一貫作業を行っていたA・B・MD地区の最終調査と遺跡群北端(A・Z・百合釜地区)及び遠所古墳群西側の丘陵斜面・谷部(W・R・I・H・Q地区)、遺跡群南



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 遠所遺跡群分布図

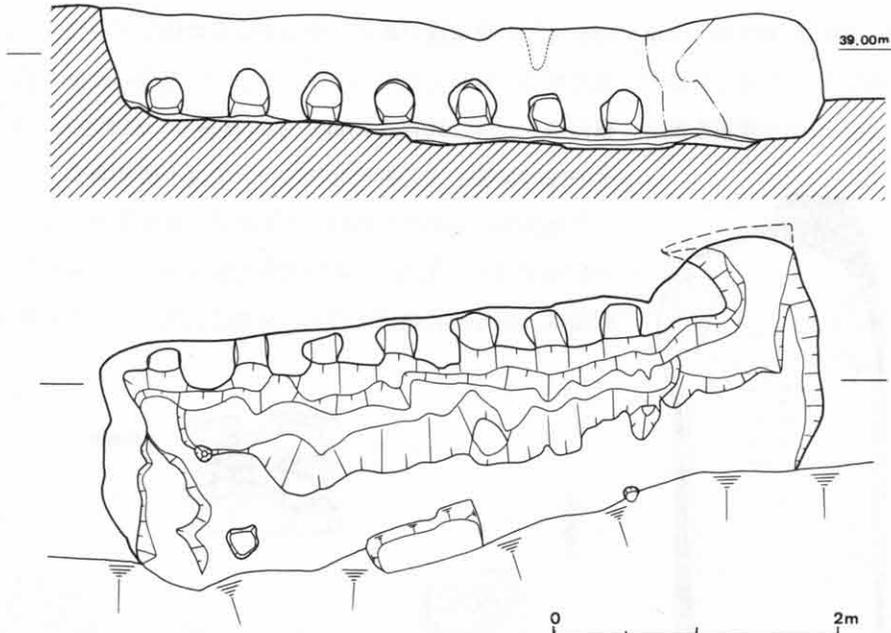


第3図 鍛冶炉断面図

西端にあたるJ—奥地区の調査を実施した。また、遠所古墳群(31・32号墳)の調査も行い、古墳群の調査を終了した。

調査概要 遠所遺跡群の中で生活・生産の営みが長期にわたって確認され、製品の出荷場としても利用されていた、A・B・MD地区の最終調査を行った。ただし、B地区については、奈良時代後期の生活面で保存されることになり、下層遺構の調査は行っていない。

調査の結果、狭い谷地形での生活空間を確保することが非常に困難であったようで、B地区丘陵斜面中腹にまで竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が造られていたことを確認した。また、ここから鍛冶炉1基も検出し、丘陵斜面に築いた平坦地を利用してまで、鉄生産作業を行っていたことがわかった。この鍛冶炉は、径約35cmを測り、炉壁約3cm、焼土約5cmであった。炉壁は、一部修復されていた(第3図上段)。谷中央には、一部人為的に改修した自然流路があり、流路内からは多量の土器片・木製品が出土した。出土土器から、この谷には6世紀後半から人が生活し始めるが、8世紀後半に大々的に営んでいたことを確認した。須恵器・土師器以外に、紡錘車・砥



第4図 横口付き炭窯実測図

石・大形石錘・叩き石・凹石・織機・琴柱・下駄・木製農具(鋤)・建物用材・木の実・貝殻・獣骨・勾玉・切子玉など、生活の痕跡が生々しく残るものが出土している。また文字資料としては、墨書土器「菅」や呪符木簡も認められ、円面硯も出土している。

流路近くからは、約4.5m×3.5mの土坑を検出し、多量の砂鉄を採集している。この砂鉄は、鉄生産に使用されたと考えられるが、科学的分析結果を待ち今後検討を要する遺構である。

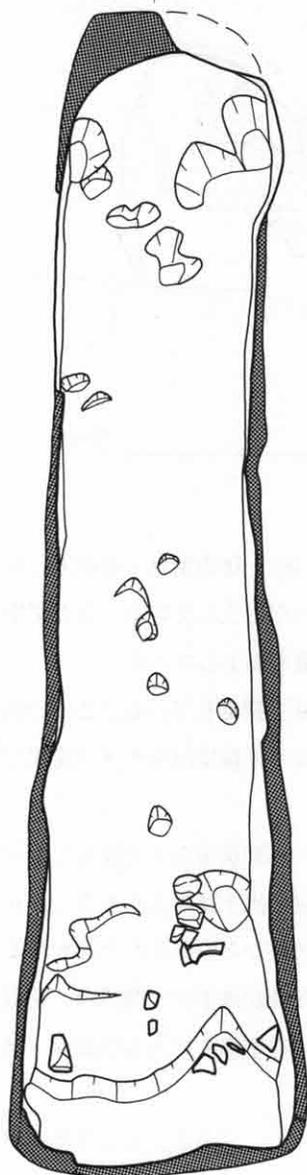
古墳群北西に位置するW地区からも竪穴式住居跡・流路跡・小形炭窯などを検出した。流路内からは、多量の土器片や木製品が出土したが、MD地区の出土遺物よりも古く、6世紀中頃の時期のものが大半を占める。流路付近からは、住居跡から投棄したと思われる土器溜りが見つかった。ほとんどが土師器で完形品もあり、6世紀後半の土師器の一括資料を得ることができた。また、木製品は非常に良好であり、現在整理中であるが織機・建物用材・梯子などが出土している。

A・H・R・I・Q地区からは、炭窯・柱穴などの遺構を検出している。ここでは、その中の顕著な遺構を取り上げて説明する。

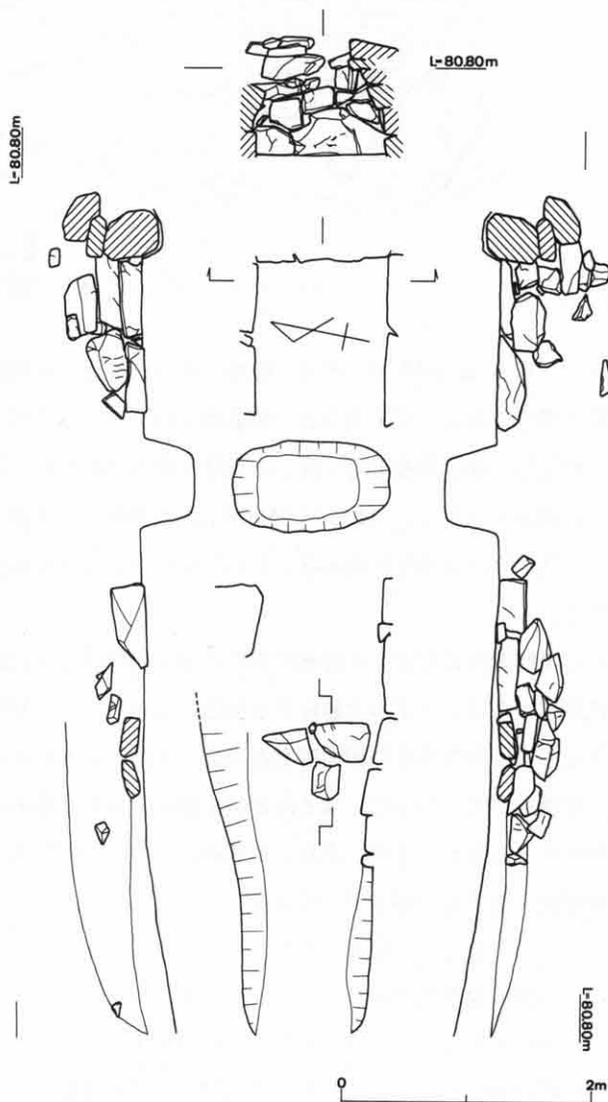
A地区より、横口の付く炭窯を2基検出した(第4図)。1基は、A・B地区の谷口の南側丘陵斜面に構築されており、7か所の横口を確認した。全長約5mで、約50cmごとに横口が付く。横口は、直径約30cmを測る。窯体幅については、調査地外になるため不明で

ある。横口前面には、5m×1.5mほどの平坦地があり、多量の炭が堆積していた。ここで炭を掻き出ししたりしていたと思われる。隣接したところからも、同じ形態の炭窯1基を確認した。やや小規模な窯で、横口は5か所、残存長4.7mを測る。農道で一部壊されており、その他の規模や作業場の有無については不明である。

R地区から遺跡群で初めての形態の炭窯を確認した。3.5m×4.5mを測り、床面にわずかな溝が3条平行して確認した。床面は、部分的に焼けており、窯壁は流失していた。検出状



第5図 須恵器窯平面実測図



第6図 31号墳実測図

況から操業時の窯を考えると、丘陵斜面にわずかな平坦地を造り、土台にする木を固定するための溝を掘り込み木を寝かせ、その木の上に薪を直交するように積み上げ、粘土で覆って、蒸し焼きにしたと思われる。

H地区の西側丘陵斜面から須恵器窯1基を検出した。半地下式の登窯で、全長約6m・最大幅1.5m、床面傾斜角度約35度を測る。窯体内出土遺物から、奈良時代後半に操業していたと考えられる。灰原は、谷部にあたり、すべて流失していた(第5図)。

31号墳 古墳群最南端、最高所に位置する直径14m・高さ2.3mの円墳である。古墳周囲には、尾根と区画する幅約2.3mの溝が「C」字状にめぐっていた。埋葬施設は、竪穴系横口式石室で、全長4.5m・幅1mを測る。石室は、丹後大震災の地割れが主軸に対し約45度の方向に認められた。過去の採石や盗掘のため、天井石と玄室中央部の両側石は抜き取られていた。出土遺物としては、須恵器杯身・杯蓋・甕・鉄鏃・刀子・土師器高杯・杯が出土し、古墳は6世紀中頃に築造され、6世紀末頃に追葬されていたことが判明した。墳丘上からは、口縁部を欠いた甕が出土しており、祭祀にかかわるものと思われた。

32号墳 31号墳南側の古墳で、直径約10m・高さ2mの円墳である。墳丘盛り土の大半は流失していた。埋葬施設は木棺直葬であると思われるが、流失しており規模等については不明である。出土遺物としては、須恵器杯身・杯蓋・甕・壺・土師器高杯・杯が出土し、6世紀中頃に築造されたと考えられる。

まとめ 発掘調査の結果、新たに炭窯や須恵器窯、住居跡などの遺構を確認でき、また形態の異なった炭窯も発見することができた。J-奥地区からの炭窯の確認(試掘調査)は、従来考えられてきた遺跡の範囲が南側に広がり、大字木橋の集落の方にさらに広がる可能性がある。

また、出土遺物から谷ごとによって、生活・利用時期が異なるようで、A・B・MD地区の谷では6世紀中頃から後半と8世紀後半に、W地区付近では6世紀中頃に主に使用されており、W地区から8世紀後半の土器は出土していない。現在、遺物整理中であるため、後日土器の紹介を行いたい。

(岡崎研一)

21. 蔵ヶ崎遺跡第2次

所在地 与謝郡加悦町明石小字蔵ヶ崎
調査期間 平成3年10月22日～平成4年3月13日
調査面積 約600m²

はじめに 今回の調査は、京都府土木建築部の依頼を受けて、一般国道176号の道路新設改良事業に伴い実施した。平成2年度に行った調査では、弥生時代前期の遺物包含層及び前期の溝を確認した。この溝については、水田関連遺構である可能性が考えられたほか、溝埋土及び包含層中からは多量のイネのプラントオパールが確認された。以上の点から、今回の調査地点では水田関連遺構あるいは、低台地の末端部にあたっているため、集落域の端が確認できるものと予想し、面的な調査を行うこととした。

調査概要 昨年度トレンチの東隣接地点にトレンチを設定して掘削を行った結果、1次調査では知りえなかった多くの新知見を得て、多大な成果を上げることができた。遺構の時期は大きく弥生時代前期・同中期・奈良時代後半期の3時期に分けることができる。

弥生時代前期 幅約6mの自然流路を1条確認した。流路周辺部には、前期耕作土と考えられる黒色粘質土が広がっており、水田の具体的な構造等は不明ながらも、前期水田の存在を確認できた。また、この流路は昨年度確認した溝と調査区外の下流で合流するものと予想される。



調査地位置図(1/50,000)

弥生時代中期 前期流路埋没後、ほぼ同じ地点に水路が存在する。この水路には多数の杭列が複雑に伴っており、改修・杭の打ち換え等を行いながら利用されていたものと考えられる。さらに護岸用かと考えられる矢板列が約6mにわたって設けられている。水田に伴う水路と考えられ、土器のほか木製鋤先といった農具も出土している。水路の埋没時期は中期後半(第IV様式)であるが、溝の継続時期については遺物整理の進展を待つてからの検討課題である。

奈良時代後半 さらに上層では洪水層に覆われた水田面を検出した。土盛りの畦畔によって区画されており、4枚分が確認できるがいずれの区画も、トレンチ外に広がっており1区画の大きさが判明するものはない。同一面に存在する溝と、耕作土中及び洪水層中の土器から見て、奈良時代後半頃になるものと考えられる。

まとめ 以上2次にわたる蔵ヶ崎遺跡の発掘調査では、多くの成果を上げることができた。京都府北部地域で初めて水田遺構が確認できたこととともに、特に弥生時代前期に遡る初期水田の存在を確認したことは、日本海沿岸部の近畿北部地域では初例となる。また、前期土器も多量に出土しており、今後の整理作業に期待される良好な資料である。

(森 正)



水路に伴う矢板列(弥生時代中期)

22. 天若遺跡第3次

所在地 船井郡日吉町天若小字森形ほか
調査期間 平成3年4月15日～平成4年2月7日
調査面積 約6,900m²

はじめに 天若遺跡の調査は、日吉ダムの建設が計画され水没地となることから、水資源開発公団の依頼を受けて平成元年度から行っている。遺跡は、丹波山地を流れる桂川が形成した河岸段丘上に立地しており、調査地での標高は、162m程度を測る。

平成元年度の試掘調査で、天若遺跡が古墳時代から江戸時代にかけて断続的に形成された集落遺跡であることを確認した。平成2年度は、元年度試掘調査の1トレンチ周辺を約2,000m²にわたって拡張した。調査の結果、竪穴式住居跡5棟、掘立柱建物跡6棟以上、井戸跡1基をはじめ土坑・ピットなどを多数検出した。

調査概要 平成3年度は第3次調査として約6,900m²の調査を行った。調査の結果、竪穴式住居跡28棟をはじめ掘立柱建物跡・土坑・柱穴などを多数検出した。また、条里状の水田地割りの残る地域についても、トレンチを設け調査を行った。しかし、明確な条里地割りの遺構を検出するには至らず、遺物の包含層も認められなかった。



第1図 調査地位置図(1/50,000 京都西北部)

竪穴式住居跡は、竈をもつものがほとんどである。検出した竈をみると、壁体がよく焼け締まった竈もしくは崩壊した竈の壁体が遺存する例はごくわずかで、大半は焼土を検出ただけである。竈の使用頻度の差によるものか、竈の廃棄の際の行為に係わるものか、もしくは、移動式の竈を使用していたのか、問題を残す点である。なお、竈には立石を設けたものや、支脚として川原石を置いたものが数例ある。

土坑は、各所で検出しているが、時期を特定できるものは少ない。注目すべき土坑として、縄文時代後期の土器片が出土した2基の土坑がある。

まとめ 今回の調査では、古墳時代後期の居住区域を面的に確認することができた。

古墳時代後期の集落を確認したことから、天若遺跡が丹波山地の谷間に位置するにもかかわらず、比較的早くから開発されていたことを確かめた。大堰川の最上流地域の周山盆地地域は、遅くとも弥生時代には開発が行われていたことが知られている。天若遺跡は、この周山盆地と亀岡盆地とを繋ぐ交通の要衝にあたっていたと考えられる。

縄文時代の土坑を検出し、土器片が出土したことからも、付近で住居跡などの遺構が検出される可能性が高くなった。これまでの調査で縄文時代の遺構・遺物が検出されていないことから、大規模な集落跡ではなく、一時的な遺跡と予想される。また、遺物のみられない土坑の中には、ピットをもつものがあり、縄文時代の落とし穴となる可能性がある。

今回の調査までに検出した古墳時代の竪穴式住居跡は33棟にのぼる。これらの住居跡は、出土遺物からみて、6世紀初頭から7世紀半ば頃まで間断なく数棟ずつの単位で存在していたことが予測される。住居の規模をみると、群を抜いて大きなものが数棟存在している。一時期に一棟的なあり方らしく、詳細な検討が必要であろう。今後の調査により、竪穴式住居跡はさらに増える可能性があり、一集落内における住居の変遷や居住域内での住居の構成などがある程度理解できそうである。

条里状地割りを残す水田跡の調査は、期待した成果を挙げるができなかった。しかし、周囲の状況から判断すると、古墳時代以降主たる水田耕作地は、居住域の南側を流れる千谷川を利用した谷水田であったものと思われる。

これまでの調査で、縄文時代の土坑、6世紀から7世紀前半期にかけての竪穴式住居跡33棟、7世紀後半期の土坑、8世紀前半期の井戸跡、及び奈良時代から平安時代にかけてと思われる掘立柱建物跡数棟を検出した。また、遺物には、縄文時代の土器及び石器・石片や、弥生時代及び古墳時代前半期の石器、古墳時代の土師器・須恵器、中世の瓦器や陶器・磁器などがある。このことから古くから人々の営みがあり、古墳時代後期には集落が形成されていたことが確認できた。しかし、古代から中世にかけての時期の墓域や農耕域については不明な点が多い。今後の調査に期待したい。

(三好博喜)

23. 八木城跡・堂山窯跡第1次

所在地 船井郡八木町本郷
 調査期間 平成4年1月8日～3月6日
 調査面積 約800m²

はじめに 今回の発掘調査は、建設省近畿地方建設局が進めている「国道9号バイパス（京都縦貫自動車道）」建設に先立ち、同局の依頼を受けて実施した。八木城跡は、八木城の麓に家臣団などの住居が想定され、一方、堂山窯跡は奈良・平安時代の須恵器窯跡として周知の遺跡である。そのため、今年度は、遺構・遺物の広がりを確認するための試掘調査を行った。

遺跡概要 調査は、路線内に10か所のトレンチを設定した。この中から顕著な遺構を確認した1・4・10トレンチについて概述する。

1トレンチ 今年度対象地の南端で、八木城からのびる尾根の末端に位置する。山からの土石流が約1mほど堆積していたが、遺構の遺存状況は比較的良好であった。ここで、建物に隣接する水場と考えられる遺構を確認した。遺構の年代は断定できないが、上限が14世紀代に比定できる。この遺構は、八木城に関連する文献記載よりかなり古い可能性もあり、今後の調査に問題を投げかけることになった。

4トレンチ 1トレンチとは異なり、平地の水田部分に位置する。ここでは、石組みの

溝を検出し、下層には人頭大の礫を方形状に集積した遺構が広がっていた。石組み溝は、のびる方向が現在の畦畔とは異なるため、地割りの変化を考えるうえでも興味深い資料である。集石の性格は不明だが、庭園に関するものとも考えられ、ここも周辺に建物などの存在が想定される。上の石組み溝もこの集石遺構も覆土の中から、13～14世紀代の瓦器・土師器皿が出土した。また、ここからは古墳時代から平安時代までの須恵器も出土したが、中でも「□調」と墨書された土器は、



調査地位置図(1/50,000)

その文字からも注目される。

10トレンチ 山裾において、土塁状に痕跡の残る直下に設定した。この土塁の下で幅約1.5m・深さ約0.3mの溝状遺構を検出した。その南側には、人頭大の角礫を径約1mの範囲に集石した遺構も確認した。この付近から完形の瓦器皿が1点出土した。

おわりに 今回の調査は、試掘調査で、トレンチ幅は約2mと狭いため、遺構の一部を確認するにとどまったが、来年度の面的調査が期待される。

(原田三壽)

24. 長岡京跡右京第381次 (7ANMKO地区)

所在地 長岡京市東神足2丁目、勝竜寺
 調査期間 平成3年8月1日～11月6日、平成4年1月8日～1月28日
 調査面積 約300m²

はじめに 今回の調査は、府道下植野長岡京線の拡幅工事に伴い、京都府乙訓土木事務所からの依頼を受けて実施した。調査は、勝龍寺城跡東側の南北に走る道路に沿って、幅3～4mのトレンチを4か所設定して行った。ここは、従来の長岡京の条坊復原案では、七条第一小路をはさむ右京七条一坊七町～八町に位置し、さらに勝龍寺城跡、神足遺跡に含まれているため、各時期にわたる遺構・遺物の存在が予想された。

調査概要 今回の調査では、北側に位置する第1・2トレンチで多くの遺構・遺物を確認した。南側の第3・4トレンチは後背湿地状を呈し、溝を検出したのみである。以下、時代別に調査の概要を記す。

〔弥生時代〕第1トレンチで中期に属する方形周溝墓の南東コーナー部分を検出した。神足遺跡内では、最も南側に位置する周溝墓である。

〔長岡京期〕七条第一小路を含め遺構は検出できなかったが、第1トレンチの包含層で当該期の須恵器を確認した。この時期の遺構は、中世に削平を受けた可能性が高い。

〔鎌倉時代～室町〕第1・2トレンチで掘立柱建物跡、柵列、井戸、溝、土坑等を確認した。建物跡を確認したのは14世紀代のみであるが、他の遺構からその存在が予想され、右京第10・28次調査の成果とあわせ、中世神足の重要な資料となった。また、溝及び土坑

から出土した遺物は楠葉型瓦器碗の終末段階に相当し、当該期の良好な一括資料である。

〔江戸時代〕第1・2トレンチで土坑・柱穴等の遺構を検出した。これらの遺構は、勝龍寺城が洪水によって北側へ移った後に整地を行い営まれたものと推定される。

(鍋田 勇)



調査地位置図(1/25,000)

25. 木津川河床遺跡

所在地 八幡市八幡
 調査期間 平成3年12月2日～平成4年2月1日
 調査面積 約600m²

はじめに 木津川河床遺跡の発掘調査は、京都府土木建築部下水道室が計画・施工している木津川流域下水道浄化センター建設に伴う事前調査で、同部の依頼を受けて実施した。今までに6回の発掘調査が行われており、古墳時代前期・後期の集落をはじめ、中世素掘り溝、噴砂などが検出されている。木津川河床遺跡は、桂川・宇治川・木津川の三河川合流部南方に位置しており、河川による地域間交流が盛んに行われたことを示す河内・東海系の古式土師器が出土することでも知られている。また、大地震の際、発生する液状化現象に伴う噴砂が良好な状態で見られることでも知られている。

調査概要 今回の調査では、時期不明の土坑を2基検出したものの、他に明確な遺構は検出し得なかった。基本的な土層堆積状況は、近世耕作土層下に近世層が堆積しており、その下層に古墳時代前期の土器片を少量含む包含層が堆積している。噴砂は、この包含層上面で確認できるものと、近世層内で確認できるものに分けることができ、前者を慶長元(1596)年の伏見地震に伴う噴砂、後者を寛文2(1662)年の近江地震に伴う噴砂に比定できよう。

まとめ 今回の発掘調査では、2基の土坑以外、明確な遺構を検出することはできなかったが、2時期の噴砂を確認し得た。噴砂の幅・長さは、上層に堆積する粘土層の厚み等に影響されるが、幅2～3mの噴砂の存在は、古墳時代前期集落のベースとなる粘土層が安定していなかった状況を示しており、古墳時代前期集落が存在しない要因を示唆している。

(小池 寛)



第1図 調査地位置図(1/100,000)

26. 口仲谷古墳群

所在地 綴喜郡田辺町松井口仲谷
 調査期間 平成4年1月13日～平成4年2月14日
 調査面積 約280m²

はじめに 今回の発掘調査は、第二京阪道路建設に伴う事前調査であり、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施した。口仲谷古墳群は木津川の南に広がる甘南備丘陵上であり、尾根筋上に4基の円墳が周知されていた。調査対象地は古墳の存在する尾根の先端部に当たり、古墳状隆起が認められることから確認のために試掘調査を実施した。試掘調査の結果、尾根の南側中腹で1基(5号墳)、尾根筋上で2基(6号墳・7号墳)の円墳を新たに発見した。調査範囲外の尾根筋には古墳状隆起がさらに数か所存在することから、口仲谷古墳群は13基ほどの円墳から構成されていることが判明した。

調査概要 調査対象範囲内の尾根は調査開始以前に重機が入り、5号墳と尾根先端部の6号墳は全・半壊状況にあった。また、7号墳は過去に竹林の土取りで墳丘の大部分が失われていた。

5号墳は墳丘の西半部分を失っているが、直径6m・高さ1m前後の円墳である。墳丘中央部に木棺直葬とみられる埋葬主体部(半壊)が存在した。埋葬主体部は、南北1.9m・東西20cm以上・深さ30cmの規模を測る。古墳は尾根中腹を削り水平な基盤面を削り出した後、砂土による盛り土で墳丘が築かれていた。墳丘の東南部には地山を削り出した陸橋状施設が認められる。6号墳は直径約6m、7号墳は直径約10mの円墳で、尾根筋上に連続して存在する。両古墳はほぼ全壊状態で、墳丘裾部を検出したに留まった。遺物が出土せず、古墳の時期は不明である。
 (竹原一彦)



口仲谷古墳群位置図

27. 大 切 遺 跡

所在地 綴喜郡田辺町大切
 調査期間 平成4年2月3日～平成4年3月7日
 調査面積 約110m²（河川東側傾斜面精査部以外）

はじめに ^{おぎれ}大切遺跡の発掘調査は、京都府土木建築部が計画している防賀川小河川改修事業に伴う事前調査で、同部の依頼を受けて実施した。調査着手時は、「鍵田遺跡」として進めたが、本来の鍵田遺跡とは、時期的な違いもあり、また、所在地の字名も異なることから田辺町教育委員会・京都府教育委員会と協議し、「大切遺跡」と改名した。

防賀川は、田辺町を南北に流れる天井川で、今回の改修工事は、水害防止対策と天井川盛り土部分の土地の有効利用を目的として、盛り土の除去が行われた。その工事の際、地元郷土史家によって丹念な表面採集作業が繰り返され、弥生時代後期から古墳時代前期・後期、そして、中近世の遺跡であることが確認された。

調査概要 大切遺跡の発掘調査は、すでに盛り土掘り下げ工事が完了し、新たに改修された河川の河床と東西両傾斜面を対象としたため、土層堆積状況を把握することを主な目的とし、河川東側傾斜面の精査を行った。

調査地の基本層序は、最上層に近世陶磁器を含む灰白色砂礫層・灰白色砂層が堆積している。この2層は、度重なる氾濫によって堆積状況が一定しておらず、遺物には、中世の



第1図 調査地位置図(1/50,000)

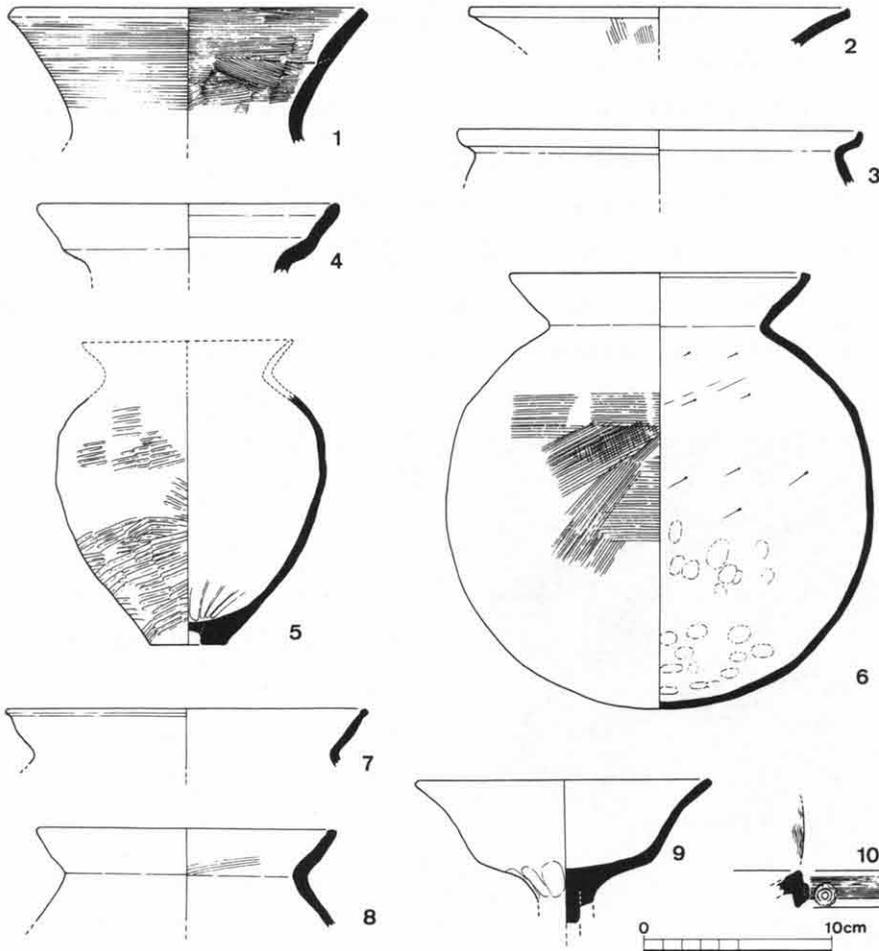
1.興戸遺跡 2.飯岡車塚古墳 3.飯岡遺跡

土器片も少量含まれる。これら砂礫層の下層には、淡灰色砂質土層が堆積しており、さらにその下層には、第2図に見られる土器を多く含む灰黒色粘質土層・暗黒褐色粘質土層が堆積している。これらの包含層からは、完形の布留式甕が出土しており、溝や土坑などの遺構が存在する可能性がある。また、この包含層は、南方に厚く、北方に薄く堆積しており、遺跡の中心が第1図に見られる範囲と想定できる。

出土土器には、弥生時代第V様式から庄内・布留式土器などがある。弥生土器・甕5は、体部外面に右上がりのタタキ目が観察でき、底部外面は、輪台状を呈している。その特徴から第V様式後半に比定できる。土師器・甕2は、生駒西麓周囲で見られる胎土を有しており、淀川・木津川を介在にした地域間交流を示唆している。

まとめ 今回の発掘調査は、すでに改修された河川の傾斜面を精査したにすぎないが、布留式甕の完形品が出土するなど、古墳時代前期の集落が存在する可能性が高くなった。当該地南東方には、前期古墳である飯岡車塚古墳が所在しており、古墳築造の背景には、大切遺跡などの前期集落の存在が大きく作用したと考えられる。なお、現況のような天井川化した時期については、盛り土の断面を観察できていない現状では言及できないが、最上層から出土した近世土器は、成立の過程を考える上で重要である。

(小池 寛)



第2図 出土遺物実測図(1/4)

資料紹介

弥生時代鉄製品の事例

野島 永

今回紹介する弥生時代の鉄器は、京都府北部舞鶴市に所在する桑飼上遺跡から出土した鉄斧である。桑飼上遺跡は、舞鶴湾に注ぐ由良川の下流域に位置しており(第1図)、縄文時代の遺跡として有名な桑飼下遺跡^(注1)、弥生時代の貼り石方形墳丘墓が検出された志高遺跡^(注2)などがその下流に位置している。

鉄斧は竪穴式住居跡26より出土しており、住居跡内の畿内第Ⅲ様式併行期の土器とともに検出された(第2図)。全長は6.7cm・刃部幅2.9cmになり、刃部は片刃で、片減りを呈する。小型で片刃であることから手斧としての機能が考えられる。袋部は、基部側で2cmたらずが密着するようであるが、詳しくは明らかではない。弥生時代の袋状鉄斧の類例からすればむしろ刃部付近のように基部側も袋部が広く開いており、銹化によって袋部が接着した可能性が高い。元来、袋部が密着していたとすれば、挿入する屨柄が小さくなりすぎ、使用に耐えられないことも考えられるからである。刃部にはわずかに層状に剝離した部分

が認められ、実見していただいた広島大学川越哲志氏によると鍛造品の可能性が高いとのことである。

丹後地域に限ってみれば、弥生時代中期以前に遡る鉄製品は中郡峰山町扇谷遺跡出土の例がある。扇谷遺跡は、丘陵斜面に濠をめぐらせた弥生時代前期末から中期初頭にかけて営まれた環濠集落で、濠内から第Ⅰ・Ⅱ様式の弥生式土器とともに板状の鉄製品が出土した。全長5.6cm・幅3.4cm・厚さ2.0cmを測る板状鉄斧とされる。清永欣吾氏によると、鉄斧は炭素量約3%を含有する鋳造品であり、



第1図 桑飼上遺跡所在地(黒丸)

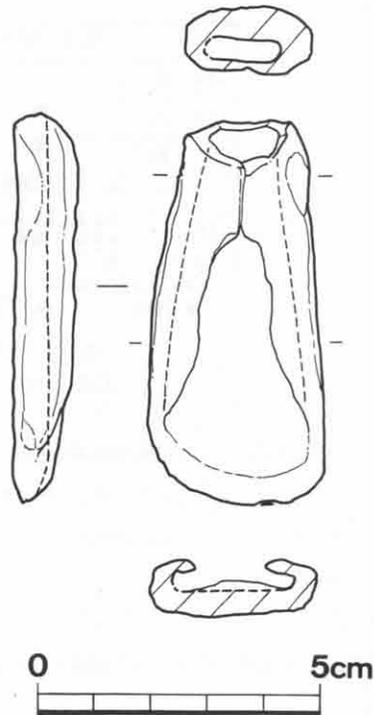
V量0.024%を含む点から砂鉄系原料により製造されたものと推定されている。また、^(注3)時期はくだるが峰山町途中ヶ丘遺跡でも中期後半から後期にかけての時期と考えられる板状鉄斧が検出され、脱炭処理が行われた^(注4)铸造品とされる。丹後地域では、近畿地方や中国地方で盛行する鍛造板状鉄斧が現在のところ出土しておらず、近畿地方では出土例の少ない铸造品が2例検出されていることは注目できる(第3図参照)。近畿地方では河内、摂津を中心に中期後半に板状鉄斧の検出例が多く、後期になると袋状鉄斧の割合が多くなるが一部、板状鉄斧も存続する。このような中で桑飼上遺跡出土の袋状を呈する鉄斧は、近畿地方でも現在時期的には類例の少ない畿内第Ⅲ様式期に属するものであり、畿内中心部とは異なる鉄器の地域性を示唆するものとして注目できるものであろう。

今回の紹介については、桑飼上遺跡の調査担当者である岸岡貴英氏に勧められ、資料を提供いただいた。また、川越哲志先生には鉄斧を実見していただいた。記して感謝いたします。

(のじま・ひさし=当センター調査第2課
調査第2係調査員)

注1 渡辺 誠編『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会
1975

注2 肥後弘幸ほか「志高遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989



第2図 桑飼上遺跡第26号住居跡
出土鉄斧実測図

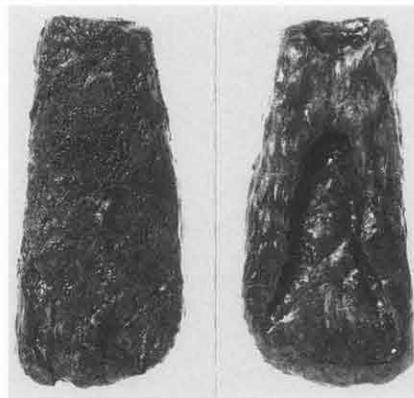


写真1 鉄斧(保存処理後)

研究ノート

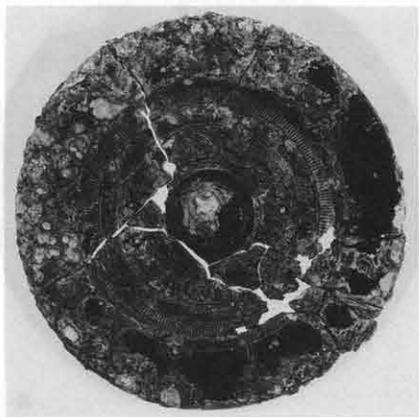
園部町垣内古墳出土の盤龍鏡

原田三壽

園部垣内古墳は、京都府船井郡園部町内林東畑に所在する前方後円墳である。古墳の全長は、約82mで、周濠部分をも含めると、約107mにも及ぶ。埋葬施設は、粘土槨で、ほぼ東西方向に長軸をおいて造られている。粘土槨の位置は、後円部中央にあり、墳丘の長軸線とほぼ一致している。木棺は、割竹形木棺で、全長6.4mを測る。1972年に、同志社大学文学部と園部町教育委員会によって発掘調査が行われた^(註1)。

出土遺物は、棺内からの、勾玉・管玉・石釧・車輪石・盤龍鏡をはじめとして多くの遺物が出土している。銅鏡や銅鎌といったもの以外では、特に鉄製品の数が多く、鉄斧・鉄鎌・鉄鑿・短甲・鉄剣など290個にも及ぶ。その内の大部分は武器・武具であり、粘土床の周囲からは、石製鎌や有孔鉄板なども出土している。

銅鏡は、計6面出土している。報告書の名称に従えば、四獣鏡・三角縁神獸鏡2面・三角縁仏獸鏡・擬銘帯神獸画像鏡・盤龍鏡の組み合わせである。出土位置は、棺内から盤龍鏡、棺の仕切板と小口板の間から三角縁神獸鏡(獸文帯三神三獸鏡)・擬銘帯神獸画像鏡、



園部町垣内古墳出土盤龍鏡



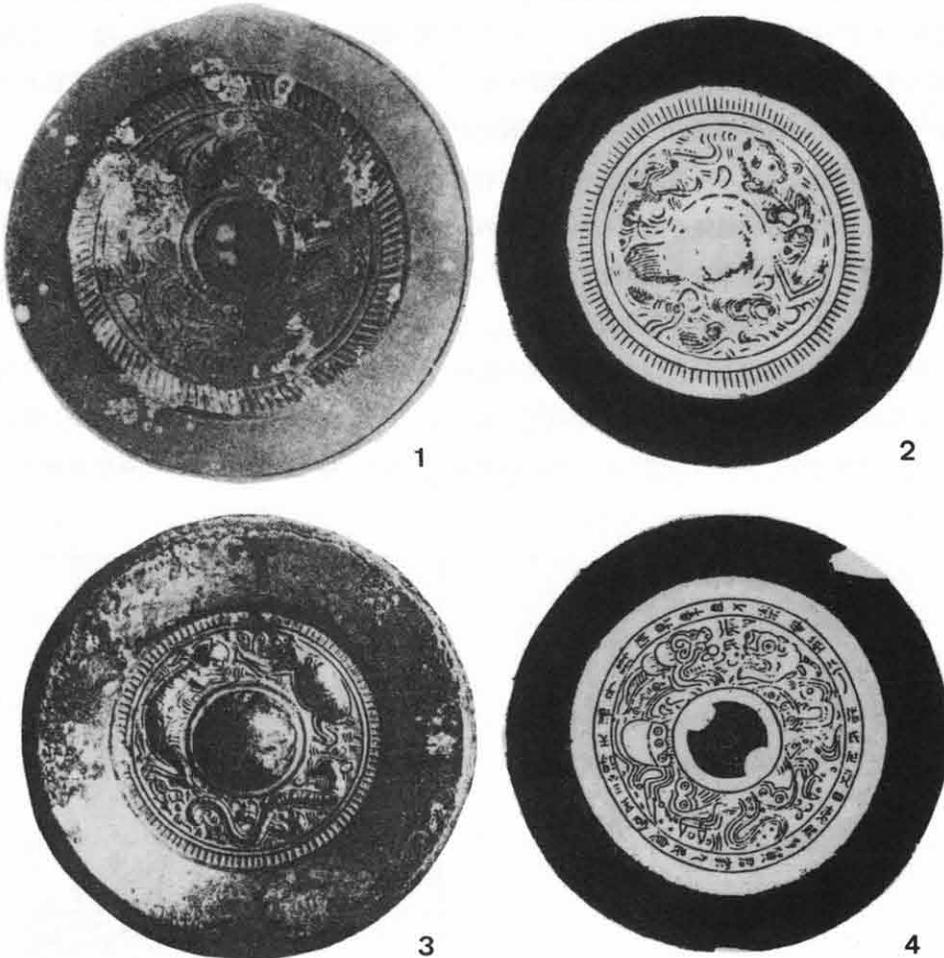
第1図 園部町垣内古墳位置図(1/50,000)

棺外槨外(棺小口板外側か?)から三角縁神獸鏡(吾作銘四神三獸一博山炳鏡)・三角縁仏獸鏡・四獸鏡である。

さて、本稿で取り扱う盤龍鏡は、6面の中で最も銹化がひどく、観察が困難である。大きさは直径14.3cmを測る。縁は幅の広い平縁で、盤龍鏡では珍しい。鈕座は、幅の狭い櫛歯文で、内区の獸形は、対向する2頭の龍と虎が半肉彫りで表現され、その間に1獣が入る2頭式である。銘帯は、カマボコ状に盛り上がり、右回りで「四夷服」式の銘文を持つ。

まず、この鏡の大きな特徴である、幅の広い平縁を持つものの類例を探してみると、1) 広西壮族自治区貴州高中水利工地東漢墓出土鏡^(注2)、2) 湖南省衡陽市茶幼鄉朱家山2号墓出土鏡^(注3)、3) 巖窟藏鏡417号鏡^(注4)、4) 金索鏡(下図参照)^(注5)などがある。

1) は、直径10.4cm、内区図像の周りは斜行櫛歯文がめぐる。2) は、直径9.5cmで、1)



第2図 幅広の平縁盤龍鏡

よりも縁は幅広く、櫛歯文は斜行しない。晋墓から出土しているが、伝世の可能性もあり鏡の製作時期のみならず、墓の時期決定にも問題を残している。3) は、直径11.1cmを測る。幅の広い縁を持つものの中でも、これはもっとも幅が広く、縁が半径の約半分をしめる。この鏡も櫛歯文を持つ。4) は、大きさが記載された文献の性格上不明である。他の鏡と違い、銘文を持つが、櫛歯文を持たない。銘文は、「張氏作竟四夷服、多賀国家人民息、宦至三公得天福、子孫脩具孝且力、樂母亟兮」である。盤龍鏡の銘文は、このような「四夷服」式が多いが、銘文を持つ鏡で銘帯の周りに櫛歯文を持たない鏡はない。金索鏡は遊離資料ということもあり、資料としての取り扱いには注意を要しよう。

次に、鈕座の櫛歯文に注目して類例を探してみると、1) 古鏡聚英^(注6) 図版第38の5 2) 巖窟藏鏡 396号鏡 の2例しかない。1) は、直径約17cm、2龍1虎の3頭式で、「黃羊作竟四夷服、多賀国家人民息、胡虜殲滅天下復、風雨時節五穀熟、長保二親兮」の銘文を持つ。外区は鋸歯文+複線波紋+鋸歯文の精式である。2) は、直径15.4cmを測る。内区図像は、1) と同じ3頭式で、銘文は、「青蓋作竟大母傷、巧工刻之成文章、左龍右虎辟不羊、朱鳳玄武順陰□、子孫備具居中央兮」である。この鏡は、梁上椿氏も言われるように、踏み返しである。文様など全体に鮮明ではないが、これも鋸歯文+複線波紋+鋸歯文の外区を持つ。

このように、鈕座に櫛歯文を持つ鏡は2例で、両者ともに確実な発掘調査で出土した資料ではなく、遊離資料となっており、園部垣内の鏡を考えるうえで、時期などの参考にはしがたいものがある。とはいうものの、外区は、鋸歯文+複線波紋+鋸歯文の整った形であり、外区をもとに考えると型式学的には古くなるため、時期的には後漢代で、三国時代まで下るものではないだろう。

少し話はそれるが、櫛歯文以外の鈕座では有節重弧文を持つものがある。代表的なものは、三角縁盤龍鏡と呼ばれるもので、京都では、椿井大塚山古墳から出土しており、このほかには、大分・高森赤塚古墳、山口・宮ノ洲古墳、兵庫・吉島古墳、大阪・和泉黄金塚古墳、滋賀・雪野山古墳など合計11面ある。三角縁盤龍鏡以外では、鄂城62号鏡、西安東郊王家墳163号唐墓出土鏡^(注7)がある。

さて、園部垣内出土鏡の銘文であるが、報告書では「□氏作□四夷□、□□□□□□□、□□□□□□□、□□□節五穀熟、長保□□□□□、□告后世」と報告している。これから、筆者の森氏は、「□氏作竟四夷服、多賀国家人民息、胡虜殲滅天下復、風雨時節五穀熟、長保二親得天力、伝告后世」と復原した。遺存状況が悪いこともあって、筆者が森氏以上に判読しうるものはない。ちなみに、四夷服式の銘文の完形は、「□氏作竟四夷服、多賀国家人民息、胡虜殲滅天下復、風雨時節五穀熟、長保二親得天力、(官位尊顯蒙祿食、)

伝告后世楽無極」である。盤龍鏡は、この銘文に次いで、「尚方作竟大母傷、巧工刻之成文章、左龍右虎辟不祥、朱鳥玄武順陰陽、子孫備具居中央、長保二親樂富昌、壽敵金石如疾王」の「大母傷」式の銘文が多い。このほかでは、「自有紀」、「佳且好」式の銘文を持つものが目立つ。^(注8)

以上のように、園部垣内古墳出土盤龍鏡の特徴をもとに類例を探してきた。単なる資料の提示に留まったが、盤龍鏡の中では類例のない珍しい資料と言える。

園部垣内古墳出土遺物は、平成二年重要文化財に指定され、鏡は現在保存処理がなされているところである。保存処理の完了後、新知見があれば再び報告したい。

(はらだ・みつひさ＝京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

注1 同志社大学文学部文化学科「園部垣内古墳」(同志社大学文学部考古学調査報告 第6冊 1990)

注2 于鳳芝「広西出土古代銅鏡選介」(『文物』1990-1)

注3 衡陽市博物館「湖南衡陽茶山坳東漢至南朝墓的発掘」(『考古』1986-12)

注4 梁上椿『巖窟藏鏡』1940～1942 田中 琢・岡村秀典訳『巖窟藏鏡』1989 鏡番号は、田中・岡村に従った。

注5 馮雲鵬・馮雲鵠『金索』巻6 1821

注6 後藤守一『古鏡聚英』上篇 秦鏡と漢六朝鏡 1942

注7 このほかにも、陝西省勉県老道寺4号漢墓出土鏡(『考古与文物』1982-2)、広西壮族自治区鍾山県公安郷里太村出土鏡(『文物』1988-7)が、有節重弧文とは言わないまでも鈕座に意匠が認められるが、拓本が不鮮明ではっきりとはわからない。

注8 樋口隆康「中国古鏡銘の類別的研究」(『東方学』7 1953 のち、『展望 アジアの考古学』1983 所収)

海外研修だより

中国の旧石器時代遺跡を訪ねて

中川和哉

中国大陸への思い

3月1日、春の訪れを思わせるほど暖かな大阪空港を、中国民航(CA922)に乗り一路北京へ向かった。今回の参加者は、この旅行の企画者である同志社大学の松藤和人氏をはじめ稲田孝司・絹川一徳(岡山大学)、藤野次史(広島大学)、山口卓也(関西大学)、黒坪一樹(京都府埋蔵文化財調査研究センター)、古森政次・木崎康弘(熊本県文化課)、久保弘幸(兵庫県教育委員会)、鎌田俊昭、山田晃弘(東北歴史資料館)、柳田俊雄(郡山女子大学)、麻柄一志(魚津市教育委員会)、松浦五輪美(奈良市教育委員会)、アマニ・J・K(同志社大学)、加藤真二(筑波大学)の西日本の若手研究者を中心とした総勢17人のメンバーである。機内の参加者の多くは興奮気味で、これから見るであろう憧れの旧石器時代遺跡に思いを馳せるには、北京までの3時間半は短いものであった。北京の気温は夕方にもかかわらず比較的暖かく、3月の平均気温が-4度と聞かされていたためか少し拍子抜けをした。空港の到着ロビーには、今回の旅行の中国側の手配を引き受けていただいた李炎賢先生をはじめ黄慰文先生、金昌柱先生といった中国科学院古脊椎動物与古人類研究所(I.V.P.P.)の方々の出迎えを受けた。諸先生の暖かい歓迎がこれからの旅が成功のうちに終わることを約束しているかに思えた。

憧れの石器

3月2日、9時に中国科学院古脊椎動物与古人類研究所に向かった。研究所はコンクリート作りの古い小さな建物で、廊下はまだ化石や遺物などの箱があふれていた。後で、隣接地で建設中の高層ビルに移転し、



写真1 I V P P 応接室にて
(左から李炎賢・賈蘭坡・稲田孝司
・松藤和人の各氏)

今の建物は倉庫として利用されることを知らされた。先生方は「我々は今、倉庫で研究していますよ」と冗談を交えながら話されていた。研究所に行き、まず応接所にとおされ、研究所の先生方の紹介を受けた。高齢にもかかわらず、賈蘭坡先生が我々を歓迎するためにこられていたことに全員が感動を覚えた。簡単な自己紹介と挨拶が終わると、さっそく発掘資料の実見に移った。先生方の研究室に資料が用意されていた。それぞれの部屋のドアには、「…遺跡、…」と遺跡名とそれぞれの遺跡の発掘を担当されたその部屋の先生の氏名が墨で書かれてあった。研究室は、比較的狭く6人も入るといっばいであった。実見した資料は、周口店第1地点・同第15地点・観音洞遺跡・丁村遺跡・藍田公王嶺地点・白岩脚洞・峙峪遺跡・百色百谷遺跡・東谷坨遺跡・水洞溝遺跡・許家窑遺跡・虎頭梁遺跡である。遺物の観察に当たり北京空港に迎えていただいた黄先生、李先生、金先生をはじめ李傳夔副所長、張森水、林聖龍、衛奇、蓋培、陸慶五、李超榮の諸先生がたの手を煩わせた。翌日も遺物観察。

3月4日、午前中はI.V.P.P.の会議室で情報交換会が催された。会場には中国社会科学院考古研究所、北京大学からの参加者もあり立ち見の出る盛況であった。中国と日本の旧石器文化の接点を模索するために、日本の前期旧石器について山田昌弘、後期旧石器時代初頭の石器群について久保弘幸、旧石器時代末の細石刃石器群について木崎康弘の諸氏がスライドを交え最近の調査成果の発表を行った。宮城県高森遺跡の年代や、兵庫県板井遺跡などの大規模な面的調査、火山灰層中の石器の出土状況や化石の有無など中国側からの熱心な質疑や興味が寄せられた。

情報交換会が催された会議室での歓迎昼食会の後、夕食は日本側の返礼の招待宴となった。北京ダックをはじめとして、テーブルの上に所狭しと出される中華料理を味わった。お酒が進むにしたがって日本語・中国語・英語・フランス語や漢字による筆談を交え、情報交換会では話せなかったことなど話に花が咲いた。

3月5日、北京市郊外にある周口店遺跡までマイクロバスにゆられ出発した。途中、車内から日中戦争の引き金となった蘆溝橋が見られた。日中国交20周年に初めて中国を訪れたものにとってはただの石造りの橋も感慨深く思えた。周口店に着いて遺跡に併設された北京猿人展覧館の展示遺物を見学した後、各地点をまわり遺跡の立地や堆積状況を観察した。この日北京で6人と別れ、共産圏独特のうす暗い照明の北京駅から夜行寝台で一路大同市に向かった。

華北の遺跡へ

3月6日、大同市に夜明け前に到着。大同市博物館長解廷琦・胡平両先生の案内で上・下華嚴寺、大同市博物館を見学した。博物館では、青磁窑遺跡(中期旧石器)・高山遺跡

(細石器)を実見、観察した。午後、雲崗石窟へ行く途中青磁窑遺跡に立ち寄る。遺跡は川沿いの道から土作りの家の間を縫って山に昇っていく道の途中にあった。よく見ると開析が進んでいるが元は段丘面を形成していたと考えられる。発掘調査地は、段丘斜面から段丘面に至る傾斜変換点に設定されていた。この遺跡の対岸は鉄道や石炭の積み出し基地になっていたため写真の撮影は許可されなかった。

旅行者間の手違いで、虎頭梁遺跡や東谷坨遺跡のある泥河湾地区に入るための起点となる河北省陽原には宿泊することができなかった。泥河湾地区は大同市からの行程が長く、遺跡探訪は断念せざるをえなかった。

3月7日、山西省と河北省の省境にある許家窑遺跡を訪れた。ここで陽原で会うはずで

あった河北省文物研究所長鄭紹宗氏と謝飛副所長と対面した。この遺跡は小形の剝片石器とともに石球と呼ばれる石を丸く加工した石器が出土している。石器とともに多くの馬の化石が出土していることから石球によって捕獲されていたと考えられている。遺跡は、旧大同湖に堆積した地層を河川(梨益溝)によって開析された崖に遺物包含層が露出していたため発見された。いまでも、化石や石器は周辺の地層に認められる。昼食は、麦の目が芽吹いたばかりの一面の畑のなかで車座になり、結氷した川をさかんに麦酒を飲む。午後はガイドに無理を言い、大同市に戻り方向の違う内モンゴルとの省境の万里の長城見物にかけた。

3月8日、大同から山西省の太原へ移動、列車のなかでは軟座であったことから中国の人達と同席する機会をえ、聞きかじりの中国語で果敢にも話しかける人も見られた。

3月9日、山西省考古研究所を訪れ、王建名誉所長、王克林所長、王向前副所長、陳哲英旧石器研究室主任、丁建平同副主任、王益人所員、王虎應所員と対面、熱烈歓迎を受ける。日本の後期旧石器時代の石器群と類似点が指摘できる下川遺跡出土遺物(1973~1975年発掘調査資料)の観察を行った。

3月10日、山西省文物研究所にて前日実見した下川遺跡出土の石器についてその出土層



写真2 河北省許家窑遺跡



写真3 山西省考古研究所前にて
(前列右から三番目が王建氏)



写真4 丁村遺跡にて
(人物の右上方が調査地)

位、石器群の系譜、年代など日中双方の熱心な質疑応答があった。午後、列車にて臨汾に向かう。臨汾は、花果城とよばれている名に違わず、林檎や梨などを売る屋台が多く見られた。

3月11日、早朝より丁村遺跡にマイクロバスで向かう。丁村遺跡には明代の寺院を利用した臨汾地区丁村文化工作站・丁村民俗博物館があり、ここに展示されている動物化石や

石器を見学した後、陶富海副站長の案内で丁村遺跡(丁村遺跡は10数か所地点をまとめた名称である)へ向かい、遺跡の立地や堆積状況の観察を行った。遺跡は汾川に面した比高30m前後の段丘面や段丘崖に立地していた。列車にて西安へ向かう。午後10時過ぎ、西安に到着。陝西省考古研究所の魏京武副所長・韓釗所員、西北大学王維坤助教授の出迎えを受ける。

3月12日、西安市からバスに乗り白鹿塬を通り1時間半ほどで藍田猿人遺跡(公王嶺)に着く。隣接する藍田猿人遺址博物館を見学後、発掘調査地に残された黄土中に古土壌が入る地層断面の観察を行う。哺乳動物化石出土層はカルシウム分が多く凝固した土塊が多く認められた。午後には、半坡遺跡(新石器時代)の博物館の見学。

3月13日、陝西省考古研究所を訪れ、育紅遺跡、大荔遺跡、梁山遺跡、龍崗寺遺跡の旧石器時代遺物の観察の機会を得る。午後は飛行機の時間まで新装した陝西歴史博物館を見学し、青銅器や唐三彩等の遺物を堪能する。午後4時過ぎ、上海国際空港へ飛び立つ。

3月14日、上海から空路大阪に戻る。

先年、シベリアで催された国際シンポジウムに参加したとき、ノボシビルスクの科学アカデミーに置かれていたシベリア各地の出土遺物中に、あれほど顕著に見られた中期旧石器時代のルパロア技法関連遺物は、私の見た中国の資料の様相とは異なっていた。このことは以前から知られていることではあるが、はじめて両地域の石器群を実見した者にとっては新鮮な驚きであった。

今回の訪中にあたり、中国側の窓口となっていた李炎賢先生、情報交換会等で通訳の労を取っていただいた金昌柱先生、北京大学蘇哲先生、中国旧石器に触れる機会を与えていただいた松藤和人氏に記して謝意を述べたい。

(なかがわ・かずや=当センター調査第2課調査第4係調査員)

研 修 だ よ り

中国陝西省・姜宝蓮氏の研修

磯野浩光

京都府と中華人民共和国陝西省との友好府省関係にもとづく友好文化交流事業の一環として、同省文物保護技術センター文物調査研究室の姜宝蓮氏が、1991年11月1日(金)から



第1図 姜宝蓮氏

1992年1月31日(金)までの3か月間、文化財研修生として、京都府に滞在された。陝西省からの文化財研修生は、1985年6月から1986年6月までの1年間滞在された、同省文物管理委員会(当時)の范培松氏に次いで二人目である。

姜宝蓮氏は、1961年中国山西省太原市に生まれ、1983年陝西省の西北大学歴史学部考古学専攻を卒業後、陝西省文物管理委員会に勤務ののち、1991年同文物管理委員会の一部が、文物保護技術センターに移



第2図 当調査研究センターにて

行するに伴い、同保護技術センター文物調査研究室に勤務されている、女性考古学研究者で、専門は、中国の新石器時代の仰韶文化・龍山文化である。

なお、同保護技術センターは西安市の中心部、大雁塔の西北に位置する、敷地面積7万㎡、展示面積1.1



第3図 木器保存処理研修
(山城郷土資料館提供)



第4図 広島県宮島にて

万㎡という巨大な陝西歴史博物館(1991年6月開館)の構内北側に所在し、先に触れた范培松氏も現在はここに勤務しておられる。

姜氏は、教育庁指導部文化財保護課、府立山城郷土資料館と当調査研究センターにおいて、主に出土遺物の保存処理に関する技術研修のほか、発掘調査や博物館の展示の方法と日本の文化財保護行政に関することを学ばれたが、彼女の明るい性格と非常に熱心な研修姿勢は、好感をもたれ、とても評判がよかった。

当調査研究センターでは、1991年12月2日(月)から12月13日(金)の2週間、当調査研究センターの発掘調査現場(算用田遺跡、名神高速道路拡幅工事関係遺跡、西山塚古墳、蔵ヶ崎遺跡など)をはじめ、府立丹後郷土資料館などの府内各地の博物館や主要遺跡などを視察された。

山城郷土資料館では、木器保存処理のPEG含浸方法、金属器非水性アクリル樹脂含浸方法、遺構の土層はぎ取り方法と博物館の展示方法などを学ばれた。出土遺物の保存処理は、姜氏の勤務されている文物保護技術センター

の特色の一つでもあり、姜氏は非常に熱心に研修に取りくまれた。

文化財保護課では、京都府をはじめ日本の文化財保護行政の概要の研修や古都京都の史跡名勝の視察をされ、特に遺跡地図、遺跡台帳などの文化財保護行政上の基礎資料に関心を示された。

また、3か月の研修期間を通じて、東京、千葉、石川、福井、愛知、滋賀、大阪、奈良、岡山、広島博物館、埋蔵文化財センター、名所旧跡なども精力的に視察して回られた。そして、研修期間中に正月を迎えたため、上記の3つの機関の職員の自宅に招かれ、日本の正月行事を経験された。

と同時に、受け入れ側の私たちも、姜氏から中国の考古学研究、博物館事情などについて

て、多くの御教示を得ることができたことは、非常に有意義なことであった。

姜氏は、研修も終わりに近いころ、「日本の文化財の保存技術はたいへん精巧、緻密であり、博物館の展示方法もビデオや復原模型を生かして視覚に訴えてわかりやすく、また文化財保護行政や発掘調査の方法なども学ぶべきものが非常に多く、これらの技術、経験、知識を、帰国後すぐに役だてたい」と、3か月間で一層上達された日本語で、研修の感想を述べておられた。

帰国後の姜氏の益々の御活躍と、将来の再会を念願して、簡単な紹介を終えたい。

(1992年3月記)

(いその・ひろみつ=京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

センターの資料活用状況

センターの普及・啓発事業の一環として、資料の活用も図っているが、写真資料の掲載許可件数が年毎に増加している。以下、1991年度に実施した「資料の貸出」・「資料の掲載等」を掲示しておく。

1 資料の貸出一覧

	申請者	貸出資料	点数	目的	期間
1	向日市文化資料館	舞塚古墳出土 人物埴輪	1	常設展「長岡京の歴史と文化」に展示	平成3年4月1日～平成4年3月31日
2	府立丹後郷土資料館	志高遺跡出土 縄文土器・磨製石剣 高山12号墳出土 環頭大刀柄頭ほか 野崎古墳群出土 家形埴輪・鏡形土製品ほか	6 61 5	常設展「丹後の歴史と文化」に展示	平成3年4月1日～平成4年3月31日
3	府立山城郷土資料館	前瀬中世墓出土 青磁碗・和鏡ほか 内田山A-3号墳出土 家形埴輪 上人ヶ平古墳群出土 蓋形埴輪ほか 上人ヶ平埴輪窯跡出土 家形埴輪	一括 1 2 1	常設展「南山城の歴史と文化」に展示	平成3年4月1日～平成4年3月31日
4	亀岡市教育委員会	太田遺跡出土 弥生土器・石器ほか 千代川遺跡出土 弥生土器・須恵器 北金岐遺跡出土 弥生土器・木製品ほか 医王谷3号墳出土 須恵器・鉄製品・玉類ほか 千代川・桑寺遺跡出土 八葉蓮華文軒丸瓦 篠・西長尾奥1号窯跡出土 須恵器 篠・西長尾1号窯跡出土 須恵器 篠・石原畑2号窯跡出土 須恵器 篠・西長尾5号窯跡出土 須恵器	17 14 27 88 2 2 5 2 2	常設展「亀岡の歴史と文化」に展示	平成3年4月1日～平成4年3月31日
5	府立桃山高等学校	伏見城跡出土 瓦類・土器類ほか	15	校内展示	平成3年4月1日～平成4年3月31日

6	大津市歴史博物館	篠窯跡出土 須恵器 遠所遺跡出土 鉄滓など 須恵器窯割ぎ取りパネル 広隆寺跡出土梵鐘鋳型片 上人ヶ平遺跡出土 瓦類 上人ヶ平1号埴輪窯跡出土 円筒埴輪など 上人ヶ平14号墳出土 円筒埴輪	3 21 1 3 9 6 1	企画展「火の贈りもの —国づくりを支えた古 代人の技術—」に展示	平成3年4月10日～ 平成3年6月10日
7	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	上人ヶ平第7号墳出土 馬形埴輪 野崎3号墳出土 馬形土製品・犬形土製品	1 2	春季特別展「はにわの 動物園Ⅱ」に展示	平成3年4月17日～ 平成3年6月24日
8	東京都大田区立郷土資料館	木津遺跡出土 羽釜 平安京左京北辺三坊五町 出土 羽釜 平安京左京近衛・西洞院 辻出土 羽釜 大内城跡出土 鍋 大道廃寺跡出土 鍋	2 1 1 1 1	特別展「ナベ・カマの 歴史」に展示	平成3年5月16日～ 平成3年7月9日
9	京都府教育庁文化財保護課	志高遺跡出土 縄文土器 ・弥生土器・石製品ほか	125	ロビー展示	平成3年7月4日～ 平成3年9月30日
10	府立丹後郷土資料館	大道廃寺経塚出土 経筒・鏡・紙本経ほか 大内城跡古墓出土 陶器・須恵器・土師器 私市円山古墳出土 甲冑・胡籥金具・帯金具 豊富谷丘陵遺跡出土 銅鏡・須恵器 ヌクモ古墳出土 盤龍鏡 志高遺跡出土 青磁椀	18 6 一括 20 1 2	特別陳列「由良川の遺 跡—私たちの考古学Ⅱ —」に展示	平成3年7月16日～ 平成3年9月3日
11	府立山城郷土資料館	遠所遺跡群出土 鉄滓・ 鉄器片・フイゴ羽口ほか 内和田古墳出土 銅鏃・土師器 蔵ヶ崎遺跡出土 弥生土器・石のみほか 桑飼上遺跡出土 玉原 石・石ノコ・管玉・砥石 天若遺跡出土 石器・須恵器 阿婆田窯跡出土環状平瓶 八木嶋遺跡出土 須 恵器・土師器・玉類ほか 千代川遺跡出土木製扉材 平安京跡出土 緑釉軒丸 瓦・朝鮮王朝陶磁器ほか 伏見城跡出土 金箔 軒瓦・鯹瓦・土師器ほか	一括 7 7 16 12 1 20 1 11 7	企画展「発掘成果速報 —平成2年度の調査か ら—」に展示	平成3年9月3日～ 平成3年10月25日

	府立山城郷土資料館	長岡宮跡第250次出土 ミニチュア円面硯 長岡京跡左京第252次出土 軒丸瓦・軒平瓦ほか 雲宮遺跡出土 弥生土器・弥生彩文土器片 内里八丁遺跡出土 鶏形土製品・石帯ほか 興戸遺跡出土 墨書土器・錢貨・斎申ほか 瓦谷古墳出土 銅鏡・鍔形石製品・銅鍔ほか 瀬後谷遺跡出土 軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦 各遺跡写真パネル	1 7 9 3 8 一括 4 35		
12	府立山城郷土資料館	上人ヶ平古墳群出土 鳥形埴輪片・蓋形埴輪ほか 上人ヶ平埴輪窯跡出土 家形埴輪 野崎古墳群出土 家形埴輪・獣形土製品 瓦塚古墳出土 蓋形埴輪 塚本古墳出土 家形埴輪 内田山古墳群出土 家形埴輪 舞塚古墳出土 人物埴輪 塩谷5号墳出土 巫女形埴輪	7 1 3 1 1 2 1 1	特別展「京都府のはにわ」に展示	平成3年10月1日～ 平成3年11月30日
13	亀岡市教育委員会	私市円山古墳出土 甲冑・胡籥 八木嶋遺跡出土 須恵器・土師器・墨書土器ほか 千代川遺跡出土 木簡・石帯・木製扉材ほか 千代川・桑寺遺跡出土 八葉蓮華文軒丸瓦 篠・石原畑窯跡群出土 須恵器 篠・西長尾奥第2窯跡群 第1号窯跡出土 須恵器 畑山3号墳出土 銅椀 広隆寺跡出土 蓮華文軒丸瓦・梵鐘鑄型ほか 上人ヶ平遺跡出土 軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦 遠所遺跡・須恵器窯跡 剥ぎ取りパネル 各遺跡写真・イラスト パネル	一式 23 30 2 18 10 1 7 3 1 12	特別展「国分寺建立の詔發布1250年記念ー天平の巨大プロジェクト 国分寺」に展示	平成3年10月15日～ 平成3年11月22日

14	大宮町教育委員会	有明古墳群写真パネル 阿婆田窯跡群写真パネル 正垣遺跡写真パネル 谷内遺跡写真パネル	2 2 3 2	大宮町産業文化祭に展示	平成3年10月15日～ 平成3年11月6日
15	三和町郷土資料館	郷土塚4号墳出土 鉄鉋・鉄槌	2	企画展「むらのかじや」に展示	平成3年11月12日～ 平成3年12月17日
16	八木町教育委員会	小谷17号墳出土 鉄製小刀・玉類 八木嶋遺跡出土 木製品・銅銭・須恵器ほか	一括 8	八木町合併40周年記念公民館まつり「八木町の遺跡展」に展示	平成3年11月20日～ 平成3年11月28日
17	大宮町教育委員会	阿婆田窯跡群写真パネル	2	善王寺地区文化祭に展示	平成3年11月21日～ 平成3年11月26日
18	宇治市歴史資料館	隼上り遺跡出土 石槍 隼上り古墳群出土 耳環 西隼上り遺跡出土青磁椀	1 8 2	企画展「考古遺物でみる宇治の歴史と文化」に展示	平成4年1月27日～ 平成4年4月16日
19	京都府総合教育センタ	伏見城跡出土 宝輪文金箔軒丸瓦	1	レプリカ作成	平成4年2月4日～ 平成4年2月28日

II 資料の掲載等一覧

	申請者	提供資料	点数	内容	目的	期間
1	舞鶴市市史編さん室	志高遺跡出土小型仿製鏡 モノクロ写真	1	掲載	『舞鶴市史』通史編(上)	
2	(財)古代学協会	八木嶋遺跡検出遺構全景 モノクロ写真	1	掲載	『古代文化』第43巻第8号	
3	明石市教育委員会	志高遺跡出土深鉢形土器 35mm判リバーサル	1	貸出 作成	展示用パネル	貸し出し期間 平成3年4月26日～ 平成3年6月10日
4	(株)紀行社	大住車塚古墳空撮全景 モノクロ写真 恵解山古墳空撮全景 モノクロ写真 千歳車塚古墳空撮全景 モノクロ写真 久津川車塚と丸塚古墳 空撮全景モノクロ写真	1 1 1 1	掲載	『図説日本の史跡』	
5	舞鶴市市史編さん室	塩谷5号墳出土巫女形埴輪 モノクロ写真 野崎4号墳出土家形埴輪 モノクロ写真	1 1	複写 掲載	『舞鶴市史』通史編(上)	
6	府立丹後郷土資料館	私市円山古墳出土甲冑 モノクロ写真	1	掲載	「催物あんない」 1991	
7	向日市文化資料館	舞塚古墳出土人物埴輪 モノクロ写真	1	掲載	『向日市文化資料館報』第6号	
8	神奈川大学日本常民文化研究所	遠所遺跡・奈良時代の製鉄工場の復原イラスト モノクロ写真	1	掲載	『神奈川大学日本常民文化叢書2ー鍛冶道具再考ー』	

9	舞鶴市市史 編さん室	中山城跡全体地形図	1	掲載	広報紙「まいづる」 8月1日号	
10	古丹波 研究会	私市円山古墳全景 モノクロ写真 千代川遺跡検出遺構 モノクロ写真	1 1	掲載	「たには」Vol.5	
11	(株)雄山閣 出版	私市円山古墳検出各主 体部全景モノクロ写真	3	掲載	『古墳時代の研究』 第8巻	
12	(株)雄山閣 出版	内里八丁遺跡検出水田 遺構全景 4×5判リバーサル	1	貸出 掲載	『季刊 考古学』第 37号	貸し出し期間 平成3年7月22日～ 平成3年10月20日
13	(財)角川文 化振興財団	上人ヶ平遺跡全景 4×5判リバーサル 篠・黒岩1号窯跡全景 4×5判リバーサル	1 1	貸出 掲載	新版『古代の日本』 第6巻	貸し出し期間 平成3年8月5日～ 平成3年9月30日
14	(株)ジャパ ン通信社	高田山経塚出土中国製 陶磁器 4×5判カラーネガ	1	貸出 掲載	『月刊文化財発掘出 土情報』10月号	貸し出し期間 平成3年9月3日～ 平成3年9月17日
15	(株)講談社	樋ノ口遺跡検出遺構全 景 カラー写真 同 上 整理作業風 景 カラー写真 同 上 出土遺物 カラー写真 センター建物全景外観 モノクロ写真	1 1 4 1	撮影 掲載	『日本のやきもの⑥』 三彩・緑釉・瀬戸・ 常滑	撮影日 平成3年8月3日
16	長岡京市	長岡京跡右京第285・ 310次出土木簡 同 上 出土墨書土 器 モノクロ写真	3 16	撮影 掲載	『長岡京市史』資料 編Ⅱ	撮影日 平成3年9月24日
17	(財)古代学 協会	温江遺跡検出遺構 モノクロ写真	2	掲載	『古代文化』第43巻 第12号	
18	城陽市教 育委員会	赤塚古墳出土武人埴輪 モノクロ写真	1	掲載	文化財講演会用ポス ター	
19	亀岡市教 育委員会	私市円山古墳出土甲冑 モノクロ写真 同 上 出土胡篋 モノクロ写真 八木嶋遺跡全景 モノクロ写真 千代川遺跡(第14次)全 景 モノクロ写真 同 上 出土石帯 モノクロ写真 西長尾奥第2窯跡群1 号窯跡出土須恵器 モノクロ写真	1 1 1 1 1 3	掲載	特別展「天平の巨大 プロジェクト 国分 寺」の図録及び映像	

	亀岡市教育委員会	上人ヶ平遺跡建物跡全景 モノクロ写真 各種イラストパネル 遠所遺跡土層剥ぎ取り パネル作成ビデオ	1 3 1	撮影 貸出 複製		撮影日 平成3年8月27日 貸し出し期間 平成3年9月17日～ 平成3年11月27日
20	(財)京都府文化財保護基金	塩谷5号墳出土巫女形埴輪 4×5判リバーサル 同上 モノクロ写真	1 5	貸出 掲載	『文化財報』第75号	貸し出し期間 平成3年9月30日～ 平成3年10月26日
21	(株)ミネルヴァ書房	遠所遺跡の製鉄遺構 モノクロ写真	1	掲載	『クラと古代王権』	
22	三和町郷土資料館	郷土塚4号墳出土 鉄鉗・鉄槌	2	撮影 掲載	企画展「むらのかじや」の展示図録	撮影日 平成3年10月14日
23	京都映画株式会社	瀬後谷遺跡の発掘調査		撮影	歴史映画・文化財記録映画製作にあたってのフィルムライブラリー	撮影日 平成3年10月18日
24	府立山城郷土資料館	大杉古墳出土人物埴輪 モノクロ写真 丸塚古墳出土家形埴輪 モノクロ写真 赤塚古墳出土武人埴輪 モノクロ写真 塩谷5号墳出土巫女形埴輪 モノクロ写真	1 1 2 2	掲載	特別展「京都府のはにわ」の展示図録	
25	大宮町教育委員会	大宮売神社出土土器類 (『京都府埋蔵文化財情報』第8号 37ページ第3図) 有明古墳群・横穴群関係図面(『京都府埋蔵文化財情報』第21号14ページ第1図、16ページ第2図、17ページ第3図) 正垣遺跡出土遺物実測図(『京都府埋蔵文化財情報』第21号37ページ第2図)	1 3 1	転載	『大宮町遺跡地図』	
26	近畿大学文化会考古学研究会	遠所遺跡群B地区・J地区・M地区27号墳・M地区31号墳・O地区・P地区 35mm判リバーサル	12	貸出 作成	学祭パネル	貸し出し期間 平成3年10月24日～ 平成3年11月30日

27	朝日新聞社	内里八丁遺跡検出遺構 4×5判リバーサル 35mm判リバーサル	2 1	貸出 掲載	『アサヒグラフ』 1991年12月27日号 「特集1991年古代 史発掘総まとめ」	貸し出し期間 平成3年11月19日～ 平成4年1月20日
28	八木町教育委員会	八木嶋遺跡遺構各種 35mm判リバーサル 小谷17号墳遺構各種 35mm判リバーサル 6×7判リバーサル 6×6判リバーサル 八木嶋遺跡・塚本古墳 遺構写真(『第9回小さな 展覧会 京都発掘'91 』12～14ページ)	7 2 1 3 4	貸出 掲載 作成 転載	「八木町の遺跡展」 の展示図録及びパネル	貸し出し期間 平成3年11月15日～ 平成3年11月28日
29	京都府総合府民部	長岡京跡右京第285・ 310・335次出土木簡 モノクロ写真	1	掲載	『情報公開だより』	
30	(株)第二アートセンター	志高遺跡出土縄文土器 モノクロ写真	6	掲載	ぎょうせい版『考古 学の世界』第3巻一 近畿一	
31	清水みき	長岡京跡右京第310次 出土木簡モノクロ写真	3	掲載	『中山修一先生喜寿 記念論聚』(仮題)	
32	京都府向日町地方振興局	算用田遺跡遺構全景 4×5判リバーサル	1	貸出 掲載	『地域ガイド乙訓版 』	貸し出し期間 平成4年1月23日～ 平成4年2月20日
33	大澤正己	遠所遺跡B地区出土鍛 冶炉残存椀形滓 モノクロ写真	1	掲載	論稿「韓国の鉄生産」 (古代を考える会 別冊『古代学評論』 第3号に所収)	
34	丹波町教育委員会	塩谷5号墳出土巫女形 埴輪2体 4×5判リバーサル	1	貸出 掲載	『町勢要覧』	貸し出し期間 平成4年2月14日～ 平成4年3月31日
35	大宮町教育委員会	正垣遺跡検出遺構 35mm判リバーサル 谷内遺跡検出遺構 35mm判リバーサル 有明古墳群・横穴群検 出遺構 35mm判リバーサル 阿婆田窯跡群検出遺構 35mm判リバーサル	3 2 3 3	貸出 作成	啓蒙用パネル	貸し出し期間 平成4年2月20日～ 平成4年3月31日
36	(株)集英社	聚楽第跡出土金箔ワカ ラー写真(朝日新聞掲載 分)	1	掲載	『集英社版 日本の 歴史』第11巻一天下 一統一	
37	滋賀県教育委員会	平山城跡全景 4×5判リバーサル	1	貸出 掲載 作成	(仮)安土城郭考古セ ンターの図録及び展 示パネル	貸し出し期間 平成4年2月20日～ 平成4年3月31日

38	府立山城郷土資料館	樋ノ口遺跡出土三彩小壺 モノクロ写真	1	掲載	平成4年度資料館お知らせリーフレット	
39	(株)雄山閣出版	平安京跡左京一条三坊二町出土陶磁器 モノクロ写真	3	掲載	『季刊 考古学』第39号	
40	綾部市教育委員会	私市円山古墳遺構全景 4×5判リバーサル 4×5判モノクロ 6×7判リバーサル 35mm判リバーサル 平山城跡遺構全景 4×5判リバーサル 三宅遺跡遺構全景 4×5判リバーサル 35mm判リバーサル 野崎古墳群全景 4×5判リバーサル 野崎4号墳出土家形埴輪 4×5判リバーサル 私市円山古墳発掘調査記録映像フィルム	12 10 1 1 1 1 1 1 1 1 1 4	貸出 掲載 作成 複製	(仮)綾部市資料館常設展示に係る図録・写真パネル・放映	貸し出し期間 平成4年3月1日～ 平成4年3月31日
41	(株)学習研究社	聚楽第跡出土金箔瓦カラー写真(京都新聞掲載分)	1	掲載	6年の学習7号別冊教材付録『重要人物・日本の歴史』中巻	

(松井忠春・田中 彰)

府内遺跡紹介

55. 氷室跡

氷室跡は、京都市北区西賀茂氷室町に位置し、現在氷室地区集落西側の山中に3か所確認されている。この氷室跡は、旧山城国愛宕郡にあった氷室5か所のうちの一つである。

氷室は、冬に氷池で自然に氷を張らせて採取し、それを人工の貯蔵庫で保管して、夏にそれを使用するために設けられた。もっとも、氷はだれもが使用できるものではない。

『延喜式』の記述では、供御料としては天皇・中宮(皇后)・東宮(皇太子)・齋内親王(齋宮)・妃・夫人・尚侍・侍従に限られていた。ただ、長屋王家木簡の記述にも氷室が見えることから、上級貴族層も氷を使うことはできたようである。12世紀の例ではあるが、『朝野群載』巻八の永久4(1116)年6月1日付け文書によれば、「関白殿下御料」・「右大臣御料」をはじめ、「官史生食所料」などもみえており、実際はもう少し広い範囲の人が氷を使用できたようである。

ところで、実際に氷を搬出するに当たっては、その年の正月1日に行われる元日朝賀を中心とする儀式の後で、「氷様奏」という氷のでき具合の奏上があって、その年の氷の状況を天皇に報告する儀式が9世紀の記録に見えている。実際に氷を運び出す期間は、『延喜式』によれば、4月1日から9月30日までで、毎日運ぶ数も決められている。

史料上、もっとも古い氷室は、『日本書紀』仁徳62年(是歳)に見える氷室で、「是歳。額田大中彦皇子獵于鬪鷄。時皇子自山上望之。膽野中有物。其形如廬。仍遣使者令視。還來之曰。窟也。因喚鬪鷄稻置大山主。問之曰。有其野中者何窻矣。啓之曰。氷室也。皇子曰。其藏如何。亦奚用焉。曰。掘土丈餘。以草蓋其上。敦敷茅荻。取氷以置其上。既經夏月而不泮。其用之。即當熱月漬水酒以用也。皇子則將來其氷。獻于御所。天皇歡之。自是以後。每當季冬必藏氷。至于春分始散氷也」とある。



遺跡所在地 (1/50,000)

付表 『延喜式』主水司・供御月料条に見える氷室比定地一覧表

番号	氷室名	国名	郡名	数	比定地	備考
1	徳岡氷室	山城国	葛野郡	1	京都市右京区御室	
2	小野氷室	山城国	愛宕郡	1	京都市左京区上高野	
3	栗栖野氷室	山城国	愛宕郡	1	京都市北区西賀茂氷室山	
4	土坂氷室	山城国	愛宕郡	1	京都市北区西賀茂氷室山	
5	賢木原氷室	山城国	愛宕郡	1	京都市西京区檜原？	檜原は葛野郡
6	石前氷室	山城国	愛宕郡	1	京都市北区衣笠氷室町	
7	都介氷室	大和国	山辺郡	1	天理市福住町	
8	讃良氷室	河内国	讃良郡	1	四条畷市南野室池	
9	部花氷室	近江国	志賀郡	1	大津市上竜華・下竜華町	
10	池辺氷室	丹波国	桑田郡	1	船井郡八木町神吉 亀岡市馬路町池尻？	氷所の地名あり

これは、都介氷室のことで、8世紀に供御料として氷が朝廷に供給されていたところである。実際、先に述べた長屋王家出土木簡のなかにも長屋王家へ氷を都介氷室から運んだことを示すものがあり、平城京の段階には地理的な条件も加わってかなり重要な氷室であったことがうかがわれる。

しかし、長岡京や平安京へ遷都されると、距離的なことから従来の都介氷室に加えて京都市北部にも氷室が設けられることになったようである。『日本紀略』天長8(831)年8月条に「乙酉。山城。河内兩國各加置氷室三字。供御闕乏也」とあり、1か所とは限られていなかったようである。これは、供御料の氷が不足するようになったため、設けられた措置ではあるが、具体的な場所はわからない。距離的なことを考えると、従来の都介の氷室自体はかなり後の時代まで利用されるが、今回紹介する西賀茂所在の氷室をはじめ、平安京周辺部に氷室が設けられたことは十分考えられる。10世紀の『延喜式』主水司の供御月料として、10か所の氷室が見えている(付表)。

また、これ以外に、氷室雑用料の項目には、「氷室廿一所」とあり、それぞれ「山城十室大半。大和二室半。河内二室。近江二室小半。丹波三室半」と21か所が見えており、10世紀段階で使用できる氷室が何室あったかは正確にはわからない。その他、『朝野群載』巻八の康和3(1101)年正月21日付け「主水司解」によれば、12か所見えるので、時代に応じて増減があったことがわかる。

氷室の管轄は、宮内省被官の主水司が行うことになっていた。ここには、品部として氷戸が付属している。氷戸は、官員令別記によれば、「氷戸百冊戸。自九月至二月。毎丁役。自三月至八月。一番役卅丁」とあり、140戸からなることがわかる。この氷戸は、氷の保管・管理を直接担当したようで、交替で中央まで運搬する任にも当たっていた。

氷室の構造は、具体的な調査例がないため、はっきりとはわからない。ただ、先にあげた『日本書紀』仁徳62年是歳条に述べられていることからすれば、大きな土坑状の竪穴を約3m掘り込み、底に茅・荻のような草を敷き、そこに氷を納め、竪穴の口を草で覆って蓋をしたとある。しかも、氷は「氷池」と呼ばれる池で、冬に真水をかけて自然凍結させて作るといった原始的な製法をとっている。したがって、氷室には必ず池がごく近くに存在する。このように、構造的には非常に原始的であり、この伝承が最終的に記録された8世紀段階の氷室の構造を知るうえで貴重な記録である。むろん、氷室の構造も時代とともに変化したことはこれまでの研究のとおりであるが、基本的なあり方自体はあまり変わっていないようである。

来栖野氷室は、先にあげた供御月料のところに見える山城国愛宕郡所在の氷室5か所の一つである。江戸時代の『山城名跡巡行志』には、ここから紫竹へ通じるルートを「氷室坂」といったとある。むろん、後世の伝承であるため、正確なところはわからないが、氷室から搬出された氷は、この坂を通して平安京の大内裏へと運ばれたことが想像できる。

なお、この氷室の存在した地域は、中世以後、主水正を代々世襲した清原氏の所領となった。これは、主水司が氷室の管轄を行っていたため、その長官の地位を世襲するようになった清原氏が自家の所領としていくのは時代の趨勢であった。

現地に入ると、氷室町の集落のあるところから西方に氷室山があり、その山中に3か所の氷室跡が確認されている。具体的な調査が行われていないため、氷の積み出しやその事務を行った施設を含めた氷室全体の構造などの解明は今後の課題である。

(土橋 誠)

<参考文献>

大西源一「氷室考」『芸林』12-1 1961.2

福尾猛市郎「主水司所管の氷室について—猪熊信男氏蒐集文書の紹介をかねて—」『日本歴史』178 1963.3

井上 薫「都祁の氷池と氷室」『ヒストリア』85 1979.12

『京都市の地名』 平凡社

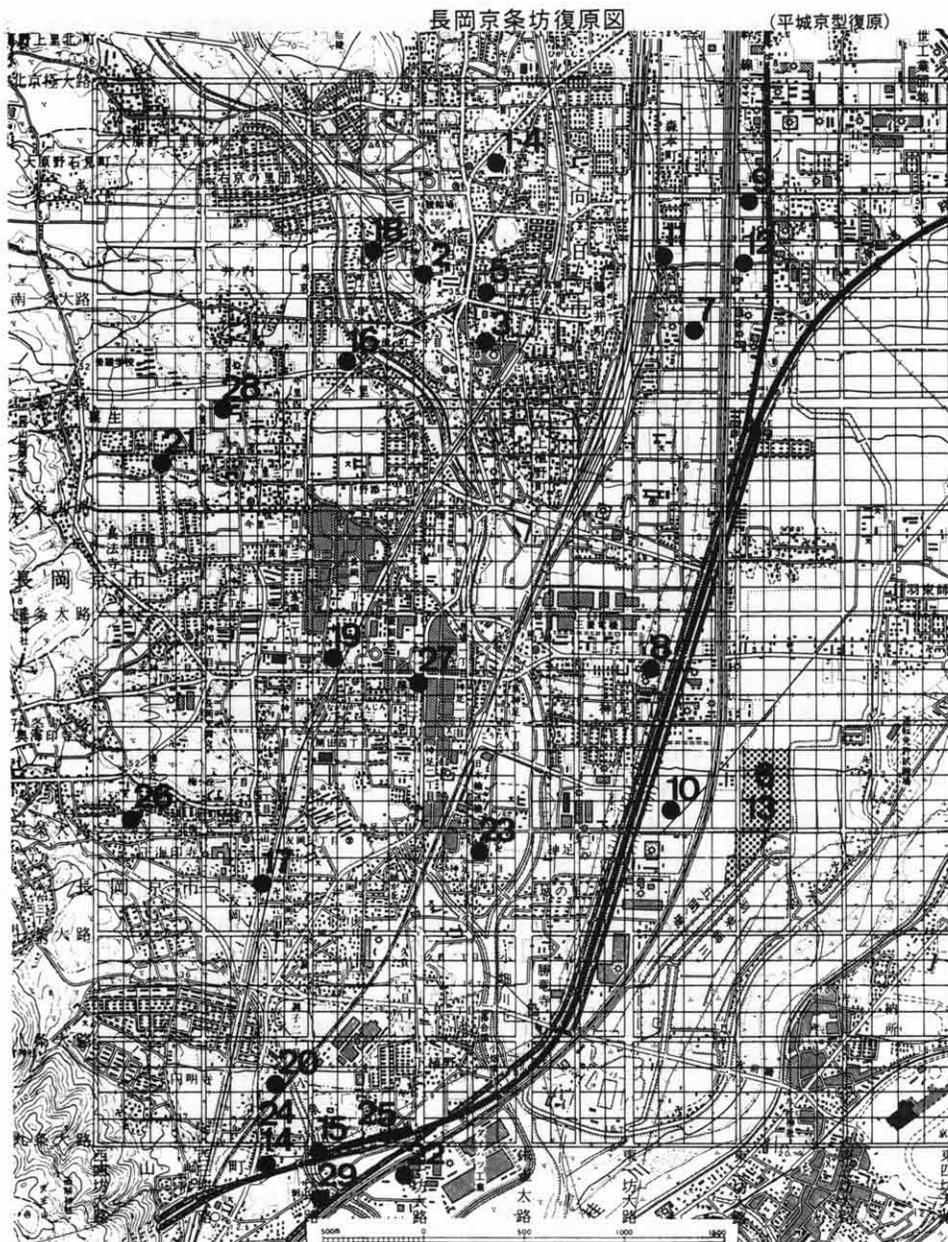
長岡京跡調査だより・41

平成4年2月26日・3月25日・4月22日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮域5件、左京域8件、右京域15件、京外その他2件の計30件であった(一覧表・位置図参照)。このうち、主なものについて調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1992年4月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第262次	7AN12K	向日市寺戸町西野辺25	(財)向日市埋文	10/1～2/29
2	宮内第266次	7AN19H	向日市向日町南山82-1	(財)向日市埋文	12/12～2/15
3	宮内第267次	7AN15U	向日市上植野町御塔道	(財)向日市埋文	2/6～3/19
4	宮内第268次	7AN12L	向日市寺戸町西野辺	(財)向日市埋文	4/6～6/30
5	宮内第269次	7AN14W	向日市鶏冠井町大極殿	(財)向日市埋文	4/6～5/2
6	左京第270次	7ANMND-1	京都市伏見区淀樋爪町	(財)京都市埋文	4/1～
7	左京第277次	7ANEJK-3	向日市鶏冠井町上古14	(財)向日市埋文	12/2～3/31
8	左京第278次	7ANLRB-3	長岡京市馬場六ノ坪1	(財)長岡京市埋文	12/24～4/17
9	左京第282次	7ANDTK-3	向日市森本町高田9-10	(財)向日市埋文	2/17～3/7
10	左京第283次	7ANMNB	長岡京市神足七ノ坪	(財)長岡京市埋文	3/9～4/18
11	左京第284次	7ANEJS-10	向日市鶏冠井町十相3	(財)向日市埋文	2/15～3/30
12	左京第285次	7ANDTK-4	向日市森本町高田29	(財)向日市埋文	3/3～3/12
13	左京第288次	7ANMND-2	京都市伏見区淀樋爪町	(財)京都市埋文	4/1～
14	右京第367次	7ANSIR-3	大山崎町円明寺・百々	(財)京都府埋文	4/8～2/26
15	右京第368次	7ANSID-2	大山崎町円明寺壺町田	(財)京都府埋文	4/8～2/26
16	右京第386次	7ANIFC-5	長岡京市今里更ノ町13	(財)長岡京市埋文	1/13～3/31
17	右京第387次	7ANNNT	長岡京市友岡西畑31	(財)長岡京市埋文	1/7～2/1
18	右京第388次	7ANCKM-2	向日市向日町北山60	(財)向日市埋文	1/13～2/6
19	右京第389次	7ANKSN-6	長岡京市長岡一丁目	(財)長岡京市埋文	2/12～4/22
20	右京第390次	7ANSKG-3	大山崎町円明寺金蔵9	大山崎町教委	2/17～
21	右京第391次	7ANHTC-2	長岡京市栗生田内40-1	(財)長岡京市埋文	3/4～3/18
22	右京第392次	7ANTGT-3	大山崎町下植野	大山崎町教委	3/19～4/16
23	右京第393次	7ANMKO-2	長岡京市東神足二丁目	(財)長岡京市埋文	4/1～5/8
24	右京第394次	7ANSDD-6	大山崎町円明寺・百々	(財)京都府埋文	4/8～2/26
25	右京第395次	7ANSID-4	大山崎町円明寺壺町田	(財)京都府埋文	4/8～2/26
26	右京第397次	7ANOHIJ-2	長岡京市下海印寺北条	(財)長岡京市埋文	4/8～5/7
27	右京第398次	7ANKSM-7	長岡京市開田二丁目34	(財)長岡京市埋文	4/15～5/20
28	右京第399次	7ANIKU-4	長岡京市今里五丁目20	(財)長岡京市埋文	4/21～6/30
29	算用田遺跡	1K-16	大山崎町円明寺宝本	(財)京都府埋文	5/26～1/31
30	山城国府跡第25次		大山崎町大山崎西谷	大山崎町教委	3/13～



▽番号は一覧表・本文 () 内と対応

調査地位置図

宮内第262次（1）

（財）向日市埋蔵文化財センター

北辺官衙の大蔵推定地に当たる。長岡京期の掘立柱建物跡（身舎2間×3間、東西南に廂）とそれを囲む柵列・溝・築地跡を検出。築地の南側に宮内道路を想定。下層で奈良時代の遺構が確認されている。

宮内第267次（3）

（財）向日市埋蔵文化財センター

朝堂院西方官衙地区。従前の調査で、凝灰岩地覆石列を伴う礎石建物基壇の一部と築地の瓦落ちが検出されている。今回の調査では、これらを再確認するとともに、新たな知見を加えた。建物跡は、東西2間（柱間4.8m）、南北5間（同3m）の南北棟に復原され、東辺に階段を敷設する。北辺からは、4m幅の築地がのび、北約15mで朝堂院南面回廊の延長に当たる東西方向の築地に接続する。難波宮式軒瓦を中心に多量の瓦類が出土した。

左京第270次（6）

（財）京都市埋蔵文化財研究所

推定左京六条三坊三町に当たる一町域の北西隅から掘立柱建物跡8棟・柵列・井戸跡2基からなる小規模な宅地跡を確認した。

調査地は、京域の南東低地で条坊施行が徹底されたかどうか関心の持たれる地域である。今回の調査では東二坊大路より東側では条坊遺構は検出されていない。先年の調査で、六条大路（小路）と東二坊大路の交差する河川跡から大量の祭祀遺物が出土しており、これを都城の四至の祓えに関するものとすれば、実質的な京の東限がこの付近に当たるものと想定される。

左京第277次（7）

（財）向日市埋蔵文化財センター

左京第265次推定東院調査地の東接地に当たる。長岡京期の掘立柱建物跡4棟のほか、西側からのびる築地及び道路側溝が検出された。各建物跡は、西側正殿域と同様、規模が大きく、整然とした配置をとり、政務に係わる施設と想定されている。下層からは、鶏冠井遺跡に係わる弥生時代中期の方形周溝墓が検出された。

（辻本和美）

（追記） 近年の調査によって、従来の条坊復原図が実態と合わなことが判明してきた。長岡京連絡協議会では、改正の方法等について現在検討中である。

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧

(平成4年4月30日現在)

理事長	福山 敏男 (京都大学名誉教授)	事務局長	城戸 秀夫
副理事長	樋口 隆康 (京都府文化財保護審議会委員 京都大学名誉教授)	次 長	中谷 雅治 佐伯 拓郎
理 事	中沢 圭二 (京都府文化財保護審議会委員 京都大学名誉教授)	総務課	課 長 佐伯 拓郎 (兼)
	川上 貢 (京都府文化財保護審議会委員 京都大学名誉教授)		課長補佐 安田 正人
	上田 正昭 (京都府文化財保護審議会委員 京都大学名誉教授)		総務係長 安田 正人 (兼)
	藤井 学 (京都府立大学文学部教授)		主 事 上田 幸正 杉江 昌乃
	足利 健亮 (京都大学教養部教授)		今村 正寿 木村 幸世
	佐原 眞 (奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター長)	調 査 課	松尾 幸枝
	都出比呂志 (大阪大学文学部教授)	第 1 課	課 長 中谷 雅治 (兼)
	藤田 价浩 (西芳寺貫主)		企画係長 水谷 壽克
	京極 隆夫 (京都府総合府民部文化芸術室長)		調 査 員 村田 照久
	武田 暹 (京都府教育庁指導部長)		嘱 託 田中 敦義
	堤 圭三郎 (京都府教育庁指導部理事 文化財保護課長事務取扱)		資料係長 辻本 和美
監 事	吉田三枝子 (京都府出納局長)	調 査 課	主任調査員 松井 忠春 土橋 誠
	加藤 裕之 (京都府監査委員事務局長)	第 2 課	調 査 員 田中 彰
			課 長 安藤 信策
			課長補佐 平良 泰久
			調査第1係長 伊野 近富
			主任調査員 増田 孝彦
			調 査 員 岡崎 研一 田代 弘
			黒坪 一樹 尾崎 昌之
			石崎 善久 岸岡 貴英
			調査第2係長 奥村清一郎
			主任調査員 引原 茂治
			調 査 員 小池 寛 三好 博喜
			八木 政明 柴 暁彦
			野島 永 河野 一隆
			調査第3係長 小山 雅人
			主任調査員 石井 清司
			調 査 員 森正 哲次 竹原 一彦
			伊賀 高弘 森島 康雄
			有井 広幸 筒井 崇史
			調査第4係長 平良 泰久 (兼)
			主任調査員 戸原 和人
			調 査 員 竹井 治雄 石尾 政信
			岩松 保 中川 和哉
			鍋田 勇

センターの動向(4. 2～4)

1. できごと
- 2.1 木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査終了(12.2～)
- 5 足利健亮理事、平安京跡・聚楽第跡(京都市)現地視察
- 6 藤井 学理事、平安京跡・聚楽第跡現地視察
- 7 平安京跡・聚楽第跡現地説明会(参加者120名)、発掘調査終了(3.11.19～)
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：京都市)出席(中谷次長、安藤課長)
天若遺跡(日吉町)発掘調査終了(4.15～)
- 10 長岡京跡右京第370次(大山崎町)発掘調査開始
- 13～18 奈良国立文化財研究所研修(城郭調査課程)出席(柴調査員)
- 14 口仲谷古墳(八幡市)発掘調査終了(1.13～)
- 15 第65回研修会(別掲)
- 21 調査員採用試験
長岡京跡右京第368次(下植野南遺跡・大山崎町)現地説明会(参加者60名)
- 24 奈良女子大学村田修三教授、八木城跡(八木町)現地指導
- 26 長岡京連絡協議会
- 27 八木城跡・堂山窯跡関係者説明会(参加者35名)
- 28 蔵ヶ崎遺跡(加悦町)現地説明会(参加者60名)
嗎岡遺跡(加悦町)発掘調査終了(1.13～)
長岡京跡右京第349・367・368次(大山崎町)発掘調査終了(4.15～)
算用田遺跡(大山崎町)発掘調査終了(5.21～)
- 3.3 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(大阪市)出席(松阪局長、小林次長、木村主事)
- 3～4 奈良国立文化財研究所工楽善通集落遺跡研究室長、蔵ヶ崎遺跡現地指導
- 6 鍵田遺跡(田辺町)関係者説明会(参加者11名)
八木城跡・堂山窯跡発掘調査終了(1.8～)
- 7 鍵田遺跡発掘調査終了(2.3～)
遠所遺跡(弥栄町)発掘調査終了(4.22～)
- 13 蔵ヶ崎遺跡発掘調査終了(10.22～)
事務職員採用試験
- 18 日中都城研究会(奈良市)出席(戸原主任調査員、磯野調査員)
- 25 第33回役員会・理事会(京都市)

平安会館)福山敏男理事長、松阪寛支
常務理事、中沢圭二、藤井 学、都
出比呂志、藤田价浩、木村英男、堤
圭三郎の各理事、吉田三枝子監事が
出席

長岡京連絡協議会

- 31 小林将夫次長兼総務課長退職
辞令交付式
- 4.1 新規採用職員辞令交付(別掲)
人事異動(別掲職員一覧表参照)
- 3~7 新規採用職員研修
- 6 西山塚古墳(木津町)発掘調査開始
- 8 長岡京跡右京第367・368次(大山崎
町)発掘調査開始
- 13 遠所遺跡(弥栄町)発掘調査開始
- 16 松阪寛支常務理事・事務局長退職
- 17 城戸秀夫常務理事・事務局長就
任、佐伯拓郎次長兼総務課長採用
新規採用職員採用(別掲)
- 20 新規採用職員研修
中谷古墳群(弥栄町)発掘調査開始
天若遺跡(日吉町)発掘調査開始
- 22 長岡京連絡協議会
- 22~24 新規採用職員現場研修
- 27 内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査開
始

2. 普及啓発事業

- 2.15 第65回研修会(於:長岡京市産業
文化会館)一奈良時代の都と村一森
島康雄「京都府北部の奈良時代の
村」、伊野近富「樋ノ口遺跡の発
掘調査」、久保哲正「加茂町恭仁
宮跡東限域の発掘調査」

3. 人事異動

- 3.31 小林将夫次長兼総務課長退職
- 4.1 森正哲次・有井広幸(京都府教育
委員会派遣)、河野一隆・筒井崇史
調査員、松尾幸枝主事採用
- 16 松阪寛支常務理事・事務局長退
職
竹中靖雄理事、木村英男理事、
前川靖典監事退任
- 17 城戸秀夫常務理事・事務局長就
任
京極隆夫理事、武田 暹理事、
加藤裕之監事就任
佐伯拓郎次長兼総務課長、村田
照久・尾崎昌之・八木政明調査員
採用(京都府教育委員会から派遣)
(安藤信策)

受贈図書一覧 (4.2.1 ~ 4.30)

苦小牧市埋蔵文化財調査センター	静川37遺跡、苦小牧市柏原5・27遺跡発掘調査(第1次)概要報告書
釧路市埋蔵文化財調査センター	釧路市北斗遺跡Ⅱ
岩手県立埋蔵文化財センター	わらびて No.55
(財)福島市振興公社	福島市埋蔵文化財報告書 第22~33・35~37・39~43・45・46集
(財)いわき市教育文化事業団	いわき市教育文化事業団年報 2、いわき市教育文化事業団研究紀要 第3号
東京都埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター蔵書目録Ⅰ、東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅸ・Ⅹ、東京都埋蔵文化財センター年報11、東京都埋蔵文化財センター調査報告 第12集(第1~5分冊)
東京都立埋蔵文化財調査センター	縄文誕生 平成4年度展示解説
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告 第122集
(財)山梨文化財研究所	帝京大学山梨文化財研究所報 第14号
(財)長野県埋蔵文化財センター	いま信濃の歴史はよみがえる
(財)愛知県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財愛知 No.28
(財)岐阜県文化財保護センター	徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集、文化財保護センターだより 第3号
富山県埋蔵文化財センター	埋文とやま 第37号
(財)滋賀県文化財保護協会	滋賀文化財だより No.162~165、文化財教室シリーズ No.124~126
(財)滋賀県埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース 第142~144号
(財)大阪文化財センター	大阪府下埋蔵文化財研究会(第25回)資料、河内平野遺跡群の動態Ⅱ 本文編・図版編、1989年度文化財講座資料集 1・2、1990・1991年度文化財講座資料集、大阪文化財研究 第2号、丹上遺跡、福田遺跡、小阪遺跡(南その1・その2・その2-2、その6-3、その7-3、その8・8-2、その9)、日置荘遺跡(その5、その2-2・その6)、太井遺跡・日置荘遺跡、大阪城跡発掘調査概要 2、池島・福万寺発掘調査概要、(財)大阪文化財センター通信 No.3~7
(財)大阪市文化財協会	葦火 36・37号
(財)元興寺文化財研究所	(財)元興寺文化財研究所通信 No.40

(財)岡山県古代吉備文化財センター	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 79、所報吉備 第11号
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	研究輯録 I、加茂学園都市開発整備事業地内(西高屋地区)遺跡群 VI、年報 VI・VII、広島県埋蔵文化財センター調査報告書 第89・91～94集、広島の遺跡 第40号
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成3年度、いにしへの讃岐 第3号
(財)松山市生涯学習振興財団 福岡市埋蔵文化財センター	分銅形土製品の謎、松山市文化財調査報告書 第25集 福岡市埋蔵文化財センター年報 第10号、開館10周年記念特別講演会
網走市教育委員会 郡山市教育委員会	嘉多山2遺跡、呼人2遺跡、美岬2遺跡、大曲2遺跡 新館遺跡発掘調査概報、安子島地区土地改良関連発掘調査報告書 3、郡山東部 11
日野市教育委員会 神奈川県教育庁生涯学習部文化財保護課	日野市埋蔵文化財発掘調査報告 5～9 神奈川県埋蔵文化財調査報告 34
埼玉県教育委員会 坂戸市教育委員会 千葉市教育委員会 市原市教育委員会	埼玉県埋蔵文化財調査年報 平成2年度 坂戸市文化財ガイド 坂戸の歴史 埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書平成3年度 平成3年度市原市内遺跡発掘調査報告、市原市内仏像彫刻所在調査報告書 北部編
木更津市教育委員会	千葉県木更津市請西遺跡群発掘調査報告書 IV、木更津市内遺跡発掘調査報告書 蔵坪遺跡
袖ヶ浦市教育委員会 富津市教育委員会	平成3年度袖ヶ浦市内遺跡発掘調査報告書 内裏塚南方遺跡第2地点・青木遺跡、神明山遺跡発掘事前総合調査報告書、加藤遺跡、西原古墳
東金市教育委員会 群馬県教育委員会県史編さん室 塩山市教育委員会 上野原町教育委員会 藤枝市教育委員会 金井町教育委員会 能都町教育委員会 小杉町教育委員会	小野遺跡D地区・E地区 群馬県出土の墨書・刻書土器集成(2) 向獄寺庭園修理事業に伴う発掘調査報告 上野原町埋蔵文化財調査報告 2 清水遺跡 金井町文化財調査報告 第9集 図説真脇遺跡 干田遺跡発掘調査概要、上野南遺跡群発掘調査報告、屋敷野池B遺跡発掘調査報告
三方町教育委員会	三方町文化財調査報告書 第10集

武生市教育委員会	武生市埋蔵文化財調査報告 IX・11・12
名古屋市教育委員会	幅下小学校遺跡第2次発掘調査概要報告、笹ヶ根1・5号墳・山沖塚・越水古墳の発掘調査報告書、東古渡町遺跡第2・3次発掘調査概要報告書、三王山遺跡発掘調査の概要、正木町遺跡第4次発掘調査概要報告書、菩薩遺跡第2次発掘調査の概要、竪三蔵通遺跡第10・11次調査の概要
常滑市教育委員会	常滑市文化財調査報告 第18～20集、常滑市民俗資料館研究紀要 V
岐阜市教育委員会	御望遺跡発掘調査概要報告書
多治見市教育委員会	多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書 第23・29・31号
古川町教育委員会	上町遺跡D地点発掘調査報告書
津市教育委員会	津市埋蔵文化財調査報告 20・22
松阪市教育委員会	中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書、口南戸古墳発掘調査報告書
滋賀県教育委員会	昭和53・63年度・平成元年度 滋賀県文化財調査年報、高橋遺跡、霊仙寺遺跡発掘調査報告書、横江遺跡発掘調査報告書Ⅱ、県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ-4、長命寺川(蛇砂川)中小河川改修工事関連埋蔵文化財調査報告3・4、石山貝塚発掘調査報告書、木瓜原遺跡試掘調査報告書、錦織・南滋賀遺跡発掘調査概要 V、石田三宅遺跡発掘調査報告書Ⅱ、白鳥川中小河川改修事業関連遺跡発掘調査報告 2、ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XⅧ-1・3・8・9
近江町教育委員会	一般国道8号(米原バイパス)関連黒田遺跡試掘調査概報
秦荘町教育委員会	秦荘町・町内遺跡群調査報告書Ⅰ・Ⅱ、安孫子北遺跡(Ⅰ、Ⅱ)発掘調査報告書
八日市市教育委員会	雪野山古墳Ⅱ
泉佐野市教育委員会	平成2年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要、向井代遺跡発掘調査概要、泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 創刊号～第3号
大阪狭山市教育委員会	大阪狭山市文化財報告書 5・6
泉南市教育委員会	中世の都市と農村
田原本町教育委員会	田原本町埋蔵文化財調査年報 2
兵庫県教育委員会	兵庫県生産遺跡調査報告 第1冊
赤穂市教育委員会	有年考古館藏品図録
芦屋市教育委員会	芦屋市文化財調査報告 第18集

伊丹市教育委員会	伊丹市埋蔵文化財調査報告書 第15集
八鹿町教育委員会	兵庫県八鹿町ふるさとシリーズ 第4集
加東郡教育委員会	埋蔵文化財調査年報 1989年度
広島県教育委員会文化課	いぶき No.1
東広島市教育委員会	東広島市教育委員会文化財調査報告書 第20集
倉吉市教育委員会	倉吉市文化財調査報告書 第61～65集
香川県教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報 平成2年度、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成2・3年度道下遺跡、河津元結木遺跡
北九州市教育委員会	北九州市文化財調査報告書 第51集
遠賀町教育委員会	遠賀町文化財調査報告書 第2集
那珂川町教育委員会	中原遺跡群 II
千代田町教育委員会	千代田町文化財調査報告書 第14・15集
大分県教育委員会	大分県内遺跡詳細分布調査概報 9・10、向野遺跡 II、植田市遺跡 IV、庄ノ原遺跡群、佐寺原・原田・岩塚遺跡他、一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 II、一般国道10号宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 III・IV、大分県文化財調査報告書 第81～85輯
大飼町教育委員会	高松遺跡、大分県大飼地区遺跡群発掘調査概報 I～III
霧島町教育委員会	霧島町埋蔵文化財調査報告書(2)
網走市立郷土博物館	網走市立郷土博物館収蔵考古資料目録 第2～5集
釧路市立博物館	釧路市立博物館々報 No.330～332
秋田県立博物館	博物館ニュース No.86
岩手県立博物館	岩手県立博物館研究報告 第9号
大船渡市立博物館	気仙の遺跡
土浦市立博物館	土浦市立博物館紀要 第3号
栃木県立博物館	栃木県立博物館研究紀要 第8号、第38回企画展図録『器』
板橋区立郷土資料館	板橋区立郷土資料館特別展 川越街道展
調布市郷土博物館	東京都目黒区守屋教育会館郷土資料室
出光美術館	平成3年度企画展写真集 新富士遺跡と富士講
埼玉県立博物館	調布市小島町遺跡、調布市郷土博物館だより No.39、展示解説シート No.20～23、調布の文化財 第10・11号
	出光美術館館報 第77号
	埼玉県立博物館館有資料目録 VIII、埼玉県立博物館紀要 17、大針貝塚・浮谷貝塚

茅ヶ崎市文化資料館	資料館だより No.77・78
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第35・36集、歴博 第51・52号
君津市立久留里城址資料館	君津市久留里城址資料館年報(平成2年度)
浜松市博物館	浜松市博物館館報 IV、図説浜松の歴史、浜松市博物館だより 36・37号
沼津市歴史民俗資料館	資料館だより 101・102号
名古屋市見晴台考古資料館	平成3年度特別展 見晴台遺跡の50年、見晴台教室 '91、年報 8
一宮市博物館	愛知県一宮市内遺跡発掘調査概要報告書、一宮市博物館だより No.13
岐阜県博物館	岐阜県博物館報 第15号
斎宮歴史博物館	特別展 王朝文化の美、斎宮歴史博物館だより No.10~12
氷見市立博物館	特別展 氷見の嫁のれん展
石川県立歴史博物館	石川県立歴史博物館年報 第3号、石川県立歴史博物館紀要 第5号、秀吉・利家・家康、石川れきはく 第23号
福井県立博物館	福井県立博物館紀要 第4号、ふくいミュージアム No.21
小松市立博物館	小松市立博物館だより 第51号
大津市歴史博物館	博物館だより 第8・9号
彦根城博物館	彦根城博物館だより 17
大阪府立弥生文化博物館	大阪府立弥生文化博物館図録 3
柏原市歴史資料館	柏原市歴史資料館館報 3
橿原市千塚資料館	企画展 橿原の飛鳥・白鳳時代寺院
紀伊風土記の丘管理事務所	紀伊風土記の丘年報 第18号
岩出町民俗資料館	岩出町民俗資料館館報 1
兵庫県立歴史博物館	塵界 第4号、歴博ニュース No.38、わたりやぐら 第22・23号
神戸市立博物館	博物館だより No.39
芦屋市立美術博物館	なりひら 第5号
西宮市立郷土資料館	西宮市立郷土資料館ニュース 第10号
播磨町郷土資料館	館報 1991
岡山県立吉備路郷土館	吉備路郷土館だより No.15
広島県立歴史博物館	広島県立歴史博物館ニュース 第9~10号
広島県立歴史民俗資料館	歴風ニュース 第2~4号
日本はきもの博物館	日本はきもの博物館だより 45・46
鳥根県八雲立つ風土記の丘	八雲立つ風土記の丘 No.112・113
九州歴史資料館	九州歴史資料館研究論集 16、九州歴史資料館年報 平成2年

福岡市博物館

佐賀県立九州陶磁文化館

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗
資料館

山形大学史学会

東北学院大学学術研究会

東京大学総合研究資料館

早稲田大学考古学会

國學院大學文学部考古学研究室

日本大学史学会

東海大学史学会

愛知学院大学文学部

金沢大学文学部考古学研究室

金沢大学資料館

大阪大学文学部

奈良大学図書館

別府大学附属博物館

鹿児島大学法文学部考古学研究室

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

北網圏北見文化センター

宮城県多賀城跡研究所

板橋区成増との山遺跡調査会

大島和泉浜遺跡調査団

葛飾区遺跡調査会

(財)韓国文化研究振興財団

近世日本城郭研究所

東北新幹線赤羽地区遺跡調査会

日本中央競馬会

御殿山遺跡調査会

(株)講談社

(株)集英社

(株)ジャパン通信社

度

収藏品目録 5・6、福岡市博物館だより No.3～5

九州陶磁文化館年報 平成2年度(NO.10)、セラミック九州
No.24

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース No.27

山形大学史学論集 第12号

東北学院大学論集歴史学・地理学 第24号

東京大学総合研究資料館ニュース 23・24号

古代 第93号

國學院大學文学部考古学実習報告 第20・21集

史叢 第47号

東海史学 第26号

愛知学院大学文学部紀要 第21号

金大考古 第19号

金沢大学資料館だより 第3号

待兼山論叢 第25号

奈良大学紀要 第20号

別府大学附属博物館だより No.36

南九州における原始・古代文化の諸様相に関する総合的研究

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 VII

北網圏北見文化センター年報、南町遺跡 III

宮城県多賀城跡調査研究所年報1990 多賀城跡、多賀城関連
遺跡発掘調査報告書 第16冊

東京都板橋区成増との山遺跡発掘調査報告書 II

大島和泉浜B遺跡発掘調査報告書

葛飾区遺跡調査報告 第4・10集

青丘学術論集 第2集

幕藩体制と城郭

赤羽台遺跡 八幡神社地区・八幡神社地区2

日本馬具大鑑 第1～4巻

東京都井の頭池遺跡群

講談社カルチャーブックス37

日本の歴史 11

月刊文化財発掘出土情報 通巻112号

(株)名著出版	歴史手帖 第221～223号
雄山閣出版	季刊考古学 第39号
鎌倉考古学研究所	史跡若宮大路遺跡発掘調査報告書 VI、鎌倉考古 No.21
(財)日本城郭協会	城郭ニュース 第29号
上粕屋厚木線発掘調査団	長竹遺跡
玉川文化財研究所	いずみ野遺跡発掘調査報告書、苦久保遺跡発掘調査報告書、 今田遺跡発掘調査報告書
本郷遺跡編纂委員会	海老名本郷(Ⅲ)
山武考古学研究所	山武考古学研究所年報 NO.9
	萱野・下田中・矢場遺跡
(財)古代学協会	古代文化 第397・398・399号、土車 第61号
(財)冷泉家時雨亭文庫	志くれてい 第40号
(社)近畿建設協会	MICHI 1992SPRING
宮内庁正倉院事務所	正倉院年報 第14号
朝鮮学会	朝鮮学報 第141・142輯
帝塚山考古学研究所	第5回考古学におけるパーソナルコンピュータ利用の現状
埋蔵文化財天理教調査団	考古学調査研究中間報告 18
淡神文化財協会	淡神文化財協会ニュース 第20・21号
六甲山麓遺跡調査会	芦屋市大原遺跡
太宰府市史編さん室	太宰府市史 考古資料編
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロードMuseum Kyushu 第38号
(財)京都市埋蔵文化財研究所	昭和61・62年度京都市埋蔵文化財調査概要、発掘ニュース No.37・38
京都市文化観光局文化財保護課	京都市の文化財 第9集
(財)向日市埋蔵文化財センター	向日市埋蔵文化財調査報告書 第33集
京都府教育庁指導部文化財保護課	重要文化財正法寺本堂修理工事報告書
宮津市教育委員会市史編さん担当室	市史編さんだより 第3号
大宮町教育委員会	大宮町遺跡地図
城陽市教育委員会	城陽市埋蔵文化財調査報告書 第22集
久御山町教育委員会	久御山町史
山城町教育委員会	京都府山城町埋蔵文化財調査報告書 第10集
京都府京都文化博物館	京都文化博物館研究紀要朱雀 第4集、京都文化博物館調査 研究報告 第6～8集
京都府立丹後郷土資料館	丹後郷土資料館だより 第23号
京都府立山城郷土資料館	山城郷土資料館だより 第16号

京都府立総合資料館

亀岡市文化資料館

京都市考古資料館

京都市歴史資料館

(財)泉屋博古館

京都大学人文科学研究所

立命館大学文学部

平安学園考古学クラブ

綾部の文化財を守る会

(財)京都府文化財保護基金

京都考古刊行会

長岡京市役所秘書広報課

加茂町役場総務課町史編さん室

伊賀高弘

岩崎浩一

鶴島三壽

小都 隆

大野左千夫

奥村清一郎

木下 良

黒田裕司

小泉信吾

谷本 進

森 浩一

森島康雄

総合資料館だより No.91

第12回企画展展示図録 職人の民俗誌

京都市考古資料館文化財講座資料 第54回

京都市歴史資料館紀要 第9号、京都市史編さん通信 No.229
～231

富岡鉄斎

京都大学人文科学研究所調査報告 第35号

立命館大学文学部学芸員課程研究報告 第3冊

白浜遺跡発掘調査報告

綾部の文化財 第34号

文化財報 No.76・77

京都考古 第65号

長岡京市市史編さんだより No.5

加茂町史だより紫陽花 第12・13号

長野市立博物館展示概説

郷土久美浜 第6号

西廂記

探訪・広島の古墳

和歌山市史 第1巻

日本塩業大系

日本古代律令期に敷設された直線的計画道の復原的研究

活力と個性ある地域づくり『豊臣秀吉軍勢と田中城攻防戦』

シンポジウム完全収録集、三加和町文化財調査報告 第3～
5集

遊戯史研究 第2・3号

此隅山城を考える 第3集、但馬竹田城、但馬考古学 第6集

同志社大学考古学シリーズ V

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第65集

「丸尾 晋氏記念文庫」の設立について



在りし日の丸尾 晋氏

平成3年7月30日、京都府立大学文学部四回生で、当調査研究センターの調査補助員として一回生のころから活躍してくれていた丸尾^{まるお} 晋^{すすむ}君が不慮の事故で亡くなった。

彼は、7月29日の夜、友人数人とともにフェリーで愛媛県に渡り、翌30日の朝から石鎚山へ登山を行った。下山途中の午後3時頃、愛媛県^{かみうげあな}上浮穴郡面河村の通称上熊淵の面河原付近で遭難した。遭難の報が届いたのは31日の月末の当センター職員全員が集まる日であった。彼の頑健な姿を思いうかべ一縷の望みをつないでいたが、やがて訃報がもたらされた。8月2日の作業日には、彼がいつも座っていた作業事務所の机に、事務所の同僚が生けてくれた花が静かに飾られていた。享年23歳であった。

彼の葬儀後、ご両親から香典の一部を当調査研究センターへ寄付したいとの申し出があった。

センターでは、ご遺族の意思を生かす方法をいろいろ検討した結果、職員の調査研究に役立ち、来所者にも活用願えと考え、特に図書類の御寄贈を受けることにした。

図書については、平凡社刊行の『東洋文庫』（全538巻）を選んだ。彼が東洋史専攻であったことや、生前、西域やモンゴルへの憧憬をもっていたことにもよる。彼はよく、『日本よりも30年も工業化が遅れているこの国には、その30年間に日本が失ってしまったものが多くある』と言っていた。きれいな水と空気、どこまでも続く広大な大地、そして遊牧民のおおらかな生活の情景が、彼を捉えて放さなかったのだと思う。確か卒業論文もモンゴル関係ですすめていたようである。

図書の贈呈式は、ご両親の出席のもと、平成3年10月7日に当センターで行われた。すえながく彼及び御両親のお気持ちが生かされることを願い「丸尾晋氏記念文庫」と命名された。

最後に、われわれ職員一同は御寄贈いただいた図書の活用に努めるとともに、故人の冥福を祈りたい。

(戸原和人)

編集後記

6月になり、何かとむしあつい日々が続きますが、情報44号が完成しましたのでお届けします。

本号は、平成4年度の最初の号ですので、今年度の予定と、昨年度調査の中で、特に成果のあったものを中心に掲載しました。また、職員の日頃の研究成果も載せることができ、充実したものになりました。なお、資料紹介として、2本の原稿を掲載しましたが、今後とも紹介文をできるだけとりあげていきたいと存じます。よろしくご味読ください。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第44号

平成4年6月25日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)